Try and Error

ミール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｒｙ　ａｎｄ　Ｅｒｒｏｒ

【Ｎコード】
Ｎ７３０２Ｖ

【作者名】
ミール

【あらすじ】
それは、神と人間の悲しき恋の物語　――――――長命の現代人
人を信じられない少年　理解されない少女　幸福だった少年
彼らは神のゲーム盤の上で踊る神の駒。神によって狂い出す運命。
神は何を考え、人は何を考えるのか。それを知るものはどこにもいない。

どれ、儂の最後のロールプレイじゃ

――古に神に巻き込まれた現代人、始まりの犠牲者、全てを知るもの――

自分は他人じゃ無い。だから理解されようとは思わない。そんなことはとうにあきらめた。だから他人も僕を理解してくれなくていい。しかし自分を押しつけられるのは大嫌いだ。

――仮面をかぶりし者、自分を隠す者、最後の犠牲者――

すごい、こんなに考えが合う人初めてよ。それに、こんなに理解してくれたのだって・・・

――孤独な少女、理解されぬ者、迷いし者――

俺たちは弱い、だから集まり、協力するんだ。

――無力な人間、巻き込まれし者、転生者、勇者――

※1話1話は短めです。また主人公はかなり最強です。それらが苦手な方はご注意ください

地図

＞i29318―3772＜

オーグドン帝国　　人間の国。大陸中央に位置する。人間至上主義国家で他種族を見下す。代々竜の加護を受けた一族（竜人）が皇帝。

メルゲン連邦　　獣人の国。現在鎖国中。外に出れば、二度と戻れない。唯一ギルドの無い国

マルンガルン共和国　　半精霊の国。魔術大国。強力な魔術で大陸の半分近くを制圧した。魔術学院など、大陸随一の魔術教育機関が集まる。

ファーレイン王国　　多種族の国。多くの種族の集まる国。冒険者としての人材が豊富。様々な文化が溶け込んだ独特の文化を持つ国。国民は比較的穏やかで、みんな友好的。王都の水の都は観光名所として有名。

第0話　プロローグ

――――第0話　プロローグ――――

「今度こそチェックメイトできるといいんですが・・・駒を並べ直すのはこれで何度目なんでしょう・・・」
青年が1人つぶやく。周りには何も無く、無が続き、青年の座る椅子と宙に浮くチェス盤がそこにあるだけだった。
「それならば、やめてしまえばいいでしょう。そんなにあの子達が見捨てられないんですか？」
何も無かった空間に1人の女性が現れ、尋ねる。
「僕は強欲なんです。一度自分の物になったのを奪われるのは大嫌いだ。それはもう、自分を押しつけられるのと同じくらいに」
「そうですか・・・私もあの子が解放されれば、それほどうれしいことはありません。それではもう何度目になるかは分かりませんが。始めましょう」
青年は女性の言葉にうなずき、ゆっくりとチェス盤の上の駒を動かした。
「君たちで終わるといいんだが・・・」

そこにははじめ、無があり、2柱の神がいた。神を作りし者『トゥーレ』時空を作りし者『ミール』
『トゥーレ』は5柱の神を作った。世界を作りし者『オース』、豊穣を作りし者『エーサ』、
人を作りし者『アーラ』、魔を作りし者『イーリ』、寿命を与えし者『ツァーリ』
彼らは神を作り、時を作り、世界を作り、生き物を作り、魔を作り、豊穣を与え、寿命を与えた。彼らは人とともに地上に住み、人との関係は良好だった。
しかし、ある時ルールは破られた。神と人が交わること。決して犯してはならない禁忌を犯したのだ。
『ツァーリ』は『ミレイユ』と交わり、禁忌を犯した。
『ミレイユ』は『ツァーリ』と交わり、禁忌を犯した。
『ツァーリ』はその力を暴走させ、人間の文明をわずか3日で滅ぼした。『ツァーリ』は激しい死闘の末、神々によって封じられた
『ミレイユ』は神の力の断片、『魔法』と『永遠』を手に入れた。
彼女は罰として『魂の番人』と『監視者』という2つの役割を背負わされた。
それ以来彼女を見た者はいない。
こうして滅びたのが始まりの文明であり、これが世界創造の7柱の神の話である。

――――禁書『ある予言者の言葉』創造の章　冒頭より一部抜粋――――

「たのむ、本当に金が無いんです。１５００万しか無いんです。そこのガキも連れてってもらってかまわないですから。どうか臓器だけは勘弁してくれ」
見窄らしい男が狭い部屋で土下座し、黒服の男に懇願する。部屋の隅には男の子。おそらくまだ3歳くらいだろう
「自分の尻ぬぐいを拾い子でするとはな。いい根性だ。いいだろう。コイツは俺たちが引き取る」
「じゃ！　じゃあ！」
「だが、それだけじゃたりねえ。２０００万だ。半額で勘弁してやる。来週までに用意できなければ・・・」
「ありがとうございます。必ず、必ず用意します」
「必ずだぞ。おい、そこのガキ。こっちにこい。おまえは今日から俺たちと暮らすんだ。名前は？」
「ん、僕、宮々院天」
男の子はしずかに立ち上がり、黒服の男へと歩く。その足取りは妙に落ち着いていて育ての親から引き離される子供とは思えなかった。
「天か。なめられないようにしろよ」
男は少年を抱きかかえ、外に出た。
宮々院天（きゅうぐういんあま）、貧しい家の一人息子として生まれる。母は天を生まれた時に死に、3歳まで父親と暮らす。
借金の形に引き取られ、その運命は狂い出す。だが、狂いはまだまだ始まったばかりだった。

「――ひ――――氷室――おい、氷室！　聞いているのか」
隣を歩く友人に話しかけられ、氷室と呼ばれた青年は意識を覚醒させる
「ああ、ごめん、ちょっと茫としてたみたいだ」
「あぶないぞ、ここら辺は車は少ないと言ってもな」
それは唐突に訪れた。信号は青、２人の青年は横断歩道を渡り、事故が起こる要素は無かった・・・はずだった。
曲がり角から突っ込んできたトラックに２人の青年ははね飛ばされ、１人は重傷、もう１人は死亡した。
一人の青年は目を覚ます。何も無い虚空に椅子と、チェス盤らしきものだけが浮いていた
「やあ、起きたかい？　君には２つ選択肢がある。１つはこのまま魂の終わりを迎えるか、もう１つは異世界に転生して、僕の手伝いをするか。僕の手伝いが終われば自由にしてくれて良い」
虚空から声がする。青年は驚き、辺りを見回すが、そこには誰もいない。
「ど、どういうことだ？　やっぱり俺は死んだのか？」
青年は動揺し、自分が最後に見た物はトラックに跳ね飛ばされる友人の横顔だったことを思い出す。そして自分に何が起こったかを理解しようとしていた。
「そうだよ。だから君には２つ選択肢がある。どちらを選ぶんだ？」
「どんなことを手伝うんだ？」
青年は、少し考え、落ち着き、そしてその内容を聞く。
「まあ、簡単に言えば、君には僕が先に行ってもらっている人の補

佐だ。その人と１６歳までは一緒にいてもらう。その後はまあ君たちの小説でもよくあるだろう？魔王を倒してほしいと言ったそういう類いだ」
青年はどうやってこっちの世界のことを知っているのか疑問に思ったようだが、ここで考えても仕方なし、とあきらめ、口を開いた。
「分かった。俺は異世界に行く。そして、その魔王とやらを打っ倒してやるよ」
「そうか・・・ありがとう。その扉から外に出れば君は０歳の赤ん坊として、異世界に生を受ける。君を育ててくれる人もいる。覚悟ができたら扉を開いてくれ。そして・・・・・・すまない――――」
虚空に扉が現れる。しかしそれは扉という重々しい雰囲気では無く、むしろドアといえるだろ動く普通の物だった。そして青年は覚悟を決め、ゆっくりとそのドアを開けようとした。
しかし開かない。押しても引いてもだめだ。まさか、とおもい青年は横に押してみると、扉は開いた。引き戸だったのだ。
青年は不安がる間もなく、開いた扉へと吸い込まれ、虚空から姿を消した。
氷室樹（ひむろ いつき）氷室家の長男として裕福な家庭に生まれる。学校からの帰宅途中でトラックに撥ねられ死亡。１８歳で現代の人生の幕を閉じる。異世界へ勇者としてふたたび生を受けるが、これから青年の運命が少しずつ狂い出すことを知るよしも無かった。

「おまえなら優勝できるよ！炎奈！　父さんは信じているよ」
父親らしき人物が８歳くらいであろう少女に励ましの声援を送る。
今日は合気道大会の決勝戦だ。
「精一杯がんばります、父様」
少女は立派な返事を返し、控え室へと歩いていく
「さすがはわが娘だ」
父親はそんな自分の娘を見て、誇らしく思うのだった。
「（そんなに期待しないでよ！　わたしだって何でもできるわけじゃ無いのに！　わたしがほしい言葉はそんな言葉じゃ無いのに。どうして誰も分かってくれないんだろう）」
娘の気持ちなぞちっとも知らずに・・・・・・　少女の疑問に答えてくれる人は一人もいなかった。その考えは今まで理解されないものだった。
少女はその後無事に優勝した。まるで相手の行動を呼んでいたかの動きで圧勝して。
西条院炎奈（さいじょういんえんな）　武術の名門、西条院家に次女として生まれる。何をしてもそつなくこなす才能から、周りから天才ともてはやされるが、本人は誰にもいえない秘密と、理解されない考え方を持ち、自らを理解されないことを嘆く。合気道以外にもあらゆる方面に才能を開花させ、家族でも天才の名をほしいがままにしている。
運命の気まぐれによって、自らを狂わせる少女であることを、他人を理解できない人間が理解できるはずも無かった。

第1話　幼子は青年へ　片手には銃を

――――――第１話　幼子は青年へ　片手には銃を――――――

借金の形に引き取られた幼子も今ではもう１６歳の青年だ。そして彼は組織でもトップの実力者だろう。高い狙撃能力に、暗殺術、夜目とその視力、同年代なら誰よりも強いはずだ。

組織、暗殺から、要人警護までを一手に引き受ける巨大組織。テロリストの摘発などを行い、実績を上げ組織は今や世界規模だ。主に要人警護を引き受けている。表向きには。

裏では、暗殺も行う組織だ。この安全な日本でさえ名前くらいは聞いたことがあるだろう。完全なスカウト制で組織には入れる人間は少ない。彼のように小さい時から訓練を受けてでもいなければとうてい入ることはできないだろう。

彼は今日帰国したばかりだ。明日は高校の入学式なのだ。青年は入学式というものは大嫌いだった。しかし、初日から問題を起こすわけにも行かないので、彼は渋々戻ってきたわけだ。

「はあ、こんなの性に合わないんだよな。まったく」

青年はため息をつく。入学先は『私立喜界山学院』　組織の息のかかった学校で小学校から大学までである。組織には彼のように若い者が少なからずいるので、そういう者達が入学するためでもある。

かなりの進学校で、数多くの生徒が毎年入学する。中学から、高校に上がるためにも試験があり、通るのはせいぜい３０人、そして、一般応募で４００人ほどだ。しかし、組織に所属していれば、出席

日数がたりなくても問題ないし、進学試験も受ける必要は無い。
「お～い。こっちだよ、天！」
天と呼ばれた青年は、遠くで叫ぶ友人を見つけ、歩き出す。
「声ででかすぎだ。順」
「早くしないと前の席とれないぜ？」
「いいんだよ。どうせ俺は真ん中くらいで寝ようと思ってたんだ」
「お？　また仕事帰りか」
天よりも少し背の高い青年、順は天と同級生で、友人だ。この学院に入ったころからのつきあいである。
「まあな。と言うわけで、俺は真ん中の席に座るぞ。それにこれが終わったらまた仕事なんだ」
「大変だなあ。おまえも。んじゃ、また今度な」
「悪いな。また今度だ」
天は真ん中のあたりに席を取り、やがて入学式が始まると、目を開けたまま眠った。

「あ～、わたしが1年A組の担任の志藤紀香です。中学からのつきあいの人もいるけど、これから一年間よろしく」
志藤紀香、小学校からずっと天の担任だ。どうも、お目付役的存在らしい。
「今日はみんな緊張したでしょうから、自己紹介とかは明日にしま

しょうか。それじゃあ、今日はもう帰っていいわよ」
短学活を終え、それぞれが帰路につく。天はバイクで空港へと移動し、チャーター機でイギリスまで飛んだ。要人警護の仕事があるのだ。

・・・くだらない要人警護の仕事が終わり、今はチャーター機のなかだ。急な眠気に襲われ、天は夢へと意識を沈めた。
そこは、何も無い世界。いや、あたりを見れば何も無い虚空に椅子と、チェス盤らしきものが浮いている。
「目覚めたね。宮々院天。君には今日勧誘に来たんだ」
何も無い虚空からの声。突然の出来事にわずかに動揺するが、天は表情に出さない
「僕は、夢でも見ているのか？」
「違う。天、異世界に興味は無いか？　そこなら君の望むものが手に入る」
「本当か？　そんな保証がどこにある。まあ、興味が無いと言えば嘘だけど」
「それは、僕が神様だから保証できるよ。しがない神の端くれだけどね」
「名前は？」
「ミール。旅の神ミールとか、時空の神ミールと異世界では呼ばれ

ている。来てくれないか？　魔術だってあるぞ？」
「興味深いな。で、僕は何をすればいいんだ？　正直、僕はこんな世界に未練は無い」
「話が早くて助かるよ。君は僕の手伝いをしてもらいたい。君を異世界に送れば、莫大な魔力だって兼ね備えられるだろうし、君の特殊な能力だってより強くなる」
「おまえ！　どこでその話を！」
「僕は神様だからね」
天は自分に特殊な能力が２つあることを１０歳の時自覚した。組織でもごくわずかしか知らないことだ。
「これらの力も強くなるのか？」
「なるだろう。それに、君はもしかしたら２つの力と思ってるのかも知れないが、それは１つの力だ。これ以上は今は教えられない。で、どうだろう？　来てくれるのかい？」
「もちろんだ」
「それじゃあ、その扉をくぐってくれ。そうすれば君は向こうの世界に降り立てる。それから君に名前をあげよう。向こうで日本の名前を名乗るのはやめた方がいい。向こうにも何人か君みたいのがいるけど、君の任務はそいつらとはまた別だ。君と同じ任務はもう１人向かわせる。君にぴったりのやつを」
「向こうにも俺みたいにこっちから行ってるやつがいるのか。分かった。そうしよう」
「君の名前はメアリエルだ。この名前には僕の加護だってつけてるんだから、大事にしてくれ」
「メアリエルか。よし。それじゃあ、行くか」
天・・・いやメアリエルは扉を開け、くぐる。

第2話　運命の出会い　孤独からの解放

――――――第2話　運命の出会い　孤独からの解放――――――

そこは森の中だった。深い深い森だ。辺りを見回せば、真後ろにはちいさな遺跡がある。

「君にはいくつか最初に行ってもらうところがある。まずは後ろにある遺跡に入ってくれ。道は僕が案内する。そこには君にとって最高の獲物がある」

頭の中に声が直接響く。あまりいい気分のものではない。

「（ああ、分かった）」

メアリエルは遺跡に入り、声に従って奥へと進む。途中でゴブリンのようなモンスターに何度か遭遇したが、持っているハンドガンで眉間を打ち抜き、比較的楽に最奥へと足を進めた。

そして、最奥には白い台座には拳銃が安置されていた。それは底の見えない海を感じさせる深い瑠璃色のハンドガン。リボルバーで見たところS＆amp；WのM686に形状はよくにている。

「それが僕からの1つめの贈り物だ。それは『宝具』と言ってね。神の力を宿した武器なんだ。こういう遺跡から発見されるんだけど、使い手じゃ無いとそれを動かせない。その宝具は唯一僕が力を与えた物だ。発見されて4000年も使い手は現れていない。君のための物だ。使うといい」

「ほぅ」

メアリエルはその台座へ手を伸ばし瑠璃色の銃を手に取る。銃は簡単に台座から外れ、台座は音も無く消滅した。木箱を残して。

「『魔弾の射手（ブリューナク）』？　なに、これは。これが例の魔法の力か」

「君は使い手に選ばれたんだ。選ばれれば自然とその宝具の名前が分かる。それは君の思うどんな銃火器にでもなる。魔術を利用したレールガンだって可能だ。君にはうってつけだろう。銃弾は君の魔力を使う。魔力は使いすぎれば、体力を消費して、最終的には死ん

じゃうから気をつけて。君なら大丈夫だろうけど。それから、覚えれば魔術だってそれで放てる。まあ、そこら辺はこの次に会いに行く人のところで覚えればいい。あとはその木箱だ。開けて」
天は声に促され、木箱の蓋を開ける。ブリューナクと同じ瑠璃色を基調とし、控えめに金の刺繍の施された上品なローブと、ちいさな袋が入っている。
「そのローブを着るといい。向こうの姿は目立つから。ローブを着とけば幾分かマシだ。それに、一応防御作用とか解毒作用とかもあるし、いろいろ便利だよ。その袋は腰に付けるといい。どんな大きさの物でも入れられるし、中に入れれば重さは感じない。テントとか旅に必要な物も入れてある。僕からの贈り物はこれだけだ。遺跡から出て、東に１０キロくらい行けば一軒家がある。そこに友人が住んでるから。この世界についてとかは彼女に聞いて。その袋のなかに手紙も入ってるし。行きたい場所までの道筋を示してくれる魔法の地図も入っている。あ、その銃は２丁拳銃にもなるし、いらない時は指輪にできるから、なおすと良いよ。思えば、もとの形に戻るから。僕はこの遺跡の周辺でしか君とは会話できないんだ。君の今の身体能力なら走れば５分もかからないだろう。幸運を祈る、メアリエル。その奥からでれば、入り口に戻れる」
天はまずブリューナクを２丁拳銃にしようと思うと、ブリューナクは２つになった。さらに、天が今は使わないな、と思うと、ブリューナクは両手の中指に指輪として、姿を変えた。
「こりゃ便利だ。よし、いくか」
天が奥の扉から外に出ると、そこは確かに入ってきた入り口だった。袋から魔法の地図と思いながら手を入れると、目的の品はすぐに見つかった。
地図を広げ、場所を確認する。なんだか、ゲームのマップを見ているようだ。メアリエルは行き先までの示されたルート、つまりはこの森を突っ切るというルートにいささか不安を覚えながら、森へと入っていった。

森道のなき道を進み、目的の場所に着いたときには夕暮れだった。
西の空は徐々に夜の帳を下ろしている。
そこはちいさな小屋だった。木造で一階立てのちいさな小屋だ。メアリエルは緊張しながら扉をたたいた。
「すいません、開けてくださいませんか？」
「あらあら、今日は来訪が多いこと。ミールには聞いていたけどね。入りなさい。もう1人来てるわよ」
扉を開けたのは長身でメアリエルと同じ瑠璃色だが、刺繍の模様が違うローブを着た女性だった。したからちらりと顔をのぞき見ると、サファイヤのような髪の色とガーネットのような瞳に、人間離れした、神々しいとも思える顔をしており、メアリエルは一瞬動揺するが、顔にそれを出すこと無く、口を開いた
「あ、ありがとうございます。え～と・・・」
「ミレイユよ」
「ありがとうございます。ミレイユさん」
「いいのよ。それより、入って入って」
促され、メアリエルは中に入る。なかは簡素な作りで、入ればすぐに食事をするための机があり、奥の方にはキッチンと、おそらくは寝室に続くのであろう扉が見える。
机にはすでに1人、おそらく16歳ほどであろう少女が席に着いている。少女は、やはり同じ瑠璃色だが、刺繍の違うローブを着てい

て、横には弦無い弓が立てかけられている。
「あなたも、地球から来たの？　名前は？」
「ああ。宮々院天。こっちの名前はメアリエル」
「あなたがメアリエルなのね。わたしは、西条院炎奈、こっちではエンフィシア」
まるでメアリエルという名前を知っていたかのような少女に、メアリエルは多少驚くが、そのことは顔には出さない。
「あらあら、あなたたち知り合いなの？」
「いや、少なくとも俺は知らないんだけど」
「わたしは、ミールから聞いていたのよ。あなたはわたしのことを理解してくれるらしいわ」
「はぁ？　他人のことなんて理解できるはずが無いじゃないか？　第一、下手に理解しようとすれば、間違った解釈で相手の逆鱗に触れることだってあるんだよ。理解しようなんて絶対にしてはいけないことだよ。それは、傲慢だ。別に理解しなくて良いじゃないか。理解することなんて不可能なんだから」
「・・・・・・すごい、こんなに考えが合う人初めてよ。それに、こんなに理解してくれたのだって・・・。ねえ、じゃあ、もう1つ質問させて？　もしあなたの娘が、何でもできる天才で、何かの大会の決勝戦の時、あなたは試合前の娘になんて励ます？」
「励まさないよ。ただ『行ってこい』というだけだ。励ますなんてプレッシャーを与えるだけで、全く本人のためにならないんだから」
「ああ、あなた最高よ！　こっちに来て本当によかったわ。あなたはミールが言った通りね。こうまで同じ考えなんて」
「ちょっと待て？　同じ？　君もなのか。たいていこんな考えだと人からは、無いわ、みたいな顔をされるんだけど。・・・・・・そうか、望む物ってのはこういうことか」
「あなたも、理解されなかったんでしょ？　分かるわよ。その気持ち。こんな考え理解されないものね。だからわたしは孤独だったもの。だけどまさか、異世界で出会えるとはね」

「全くだ。だけど、たぶん君は分かってない。君は理解されないことを悩んでたんだろ？　僕は最初こそ悩んでたけど、今は違うよ。『自分は他人じゃ無い。だから理解されようとは思わない。そんなことはとうにあきらめた。だから他人も僕を理解してくれなくていい。しかし自分を押しつけられるのは大嫌いだ』僕が出した答えだ。悩みに悩んだ末にね。悩むことには疲れてしまった。僕自身、この答えがあってるのかは分からない。だから、君もまた、悩み抜いて、君なりの答えを見つけると良い。これはあくまで、僕が至った１つの答えだ。君の悩みは君の悩みだし、それをどうこう言うのは僕の主義に反する。だけど、もし悩みすぎてつらくなったんなら、いつでも僕に言うといい。励ますくらいならできるからね」

「・・・分かったわ。わたしの求めてる答えはわたししか手に入らない物ね・・・だけど、もし必要になればお言葉に甘えさせてもらうわ」

「は～い、ストップ。２人の世界に入らないで。お願いだから。私の前でそんなことしないで」

ミレイユは心底うんざりした顔で、２人だけの世界に浸っているメアリエルとエンフィシアに言う。

「ああ、ごめんなさい。こんなこと初めてだからね」

「ああ、僕もだよ。さっきからごめん」

「まあ、それじゃあ、あなたたちには、まずこの世界のことを知ってもらわないとね。それからは、外の町に出て、冒険者ギルドにでも登録すれば良いわ。ああ、そうだ、宝具見せてくれない？　魔術刻印を刻んであげるわ」

「「魔術刻印？」」

「ああ、え～と。まあ、いろいろ効果があるのよ。発動には魔力がいるけど、２人ともとんでもない量だし。まあ、といってもこのローブにかなり良いのがすでにあるし。まあ魔力回復が早くなるのと、あと魔力障壁、それからあとは２人とも遠距離武器だから命中補正をつけておきましょうか」

「あれ、俺、銃て言いましたっけ？」
「いいえ、言ってないわよ。だけど、その指輪をみればどんな宝具か分かるわよ。形を変える宝具なんてわたしはあまりみたことが無いけど」
「これ、元に戻した方が良いです？」
「べつに、そのまま刻むから良いわ。できれば１つにしといてくれないかしら。それから、演技しなくて良いわ。さっきのも見たし」
「そうですね。じゃあ、そうします」
「じゃあ簡単にこの世界について、教えましょうか。それともご飯にする？」
「あー、わたしご飯が良い！」
エンフィシアは、ご飯、と言う言葉にすかさず反応する。どうもお腹がすいていたらしい。
「はいはい、それじゃあご飯にしましょうか。といってもそんなに食べ物無いのよね。わたし何も食べなくても良いし。そうね、ちょっとそこら辺で魔獣でも殺してくる？　それとも街に転位・・・は明日にしましょうか。あなたたちいくらローブで隠しているとはいえ、服装も全然こっちと違うし」
「えぇ！？　あなた一体何者なの？　というか、何それ、初耳」
エンフィシアが驚きの声を上げる。
「ん？　半分神様。そうね、じゃあ世界の一般的な神話の話をしましょうか」
ミレイユは真顔でそう言い、語り始めた。

第3話　語られる者　翡翠の瞳と力　弓と愛銃

――――――第3話　語られる者　翡翠の瞳と力　弓と愛銃――――――

「そこにははじめ、無があり、2柱の神がいた。神を作りし者『トゥーレ』時空を作りし者『ミール』

『トゥーレ』は5柱の神を作った。世界を作りし者『オース』、豊穣を作りし者『エーサ』、

人を作りし者『アーラ』、魔を作りし者『イーリ』、寿命を与えし者『ツァーリ』

彼らは神を作り、時を作り、世界を作り、生き物を作り、魔を作り、豊穣を与え、寿命を与えた。彼らは人とともに地上に住み、人との関係は良好だった。

しかし、ある時ルールは破られた。神と人が交わること。決して犯してはならない禁忌を犯したのだ。

『ツァーリ』は『ミレイユ』と交わり、禁忌を犯した。

『ミレイユ』は『ツァーリ』と交わり、禁忌を犯した。

『ツァーリ』はその力を暴走させ、人間の文明をわずか3日で滅ぼした。『ツァーリ』は激しい死闘の末、神々によって封じられた

『ミレイユ』は神の力の断片、『魔法』と『永遠』を手に入れた。彼女は罰として『魂の番人』と『監視者』という2つの役割を背負わされた。

それ以来彼女を見た者はいない」

「なんですか？　それ」

ミレイユが語り終えたところにエンフィシアが質問する。

「ある禁書の冒頭部分よ。といっても、広く知られている神話ね。宝具が発見される遺跡、それがこの始まりの文明の遺産だと言われるわ。宝具は神々の力が宿っている物だし。ただ、ミールはそれ以外には力を込めなかったようね。それにこの話を聞いたなら、わたしが誰か分かるでしょ？　名前ももろに残ってるしね」

「ああ、あなたが、その『ミレイユ』ですね。なるほど、半分神様な訳です」
「そうよ。あなたたちには魔術も教えてあげる。元々これを教えてあげたのはわたしだし」
「そんなことがあったなんて・・・しかし今重要なのは、わたしが飢餓の危機に立たされていることよ！」
エンフィシアはそんな話よりもご飯が大切らしい。
「一応、わたし今凄いこと打ち明けたからね？　なんで驚かないのよ？　・・・いや、異世界に来たんだから何でもありか」
「そうだ」
「異世界あるし神様の友達なんだから、別に今更驚かないわ」
「そうね・・・じゃあ、外で狩りでもしましょうか。その宝具の力も試してみたいし」
ミレイユの言葉に促され、３人は外に出る。エンフィシアは弓を持ち、メアリエルは指輪を銃にして。

「そういえば、僕どうやって使うのか知らないぞ？」
「わたしも」
「あなたたち分からないのにどうやって森を抜けてきたのよ？　魔獣がいたはずなんだけど」
「持ってきてる実銃使った」

そういって、メアリエルは自分の持っていた銃を袋から取り出して見せる。
「わたしは古武術で」
「はあ・・・まあいいわ。『使う』と思えば良いのよ。メアリエルくんのはもう魔力を吸ってるから使えるはず」
「ああ、このなんか吸われてる感じがするのが『魔力』か。へえだけどまだまだ１０発ってところか」
「そんなのが分かるの？メアリエル」
エンフィシアが問いかける
「そうみたいだ。こいつは魔力をいくらでもためられるらしいよ。何もしない時はためておけば良さそうだし。どうも指輪のままでもためられるみたいだ。あと、僕たちしかいないんだ、別に天でいい」
「それなら、わたしも炎奈って呼んで。わたしも『使う』と思えば良いのかな。それ」
その瞬間、炎奈の持つ白い弓は淡く発光し、光の粒子が漂う。張られていなかった弦も白い光で作られていた。
「『必中の矢（フェイルノート）』って言うのね。わたしの魔力を矢にするのか。これが魔力なのね～　なんか不思議な感じ。光も強すぎるわね」
エンフィシアはそう言うと、光を弱め、やがてもとの弓に弦が張られているだけになった。
「どうも、光の強さで、矢の強さがかえられるみたい」
「そういえば、弓は使えるのか？　炎奈？」
「ええ、声が聞こえるし。大丈夫」
炎奈の瞳は翡翠色に変わっている。
「おい、炎奈。どうしたんだ？　その瞳？　おまえも何か使えるのか？」
「え？　あ、わたしもしかして今カラーコンタクトしてないのか。
　ていうか、あなたも何か使えるのね？」
「ああ。僕はちょっと未来が見えるのと、あとは体感時間が凄く遅くなることだよ。まあ、ミールに言わせればこの力は２つで１つら

しいが」
「そうなんだ！　私以外にもいたのね。わたしはこれを使ってると生き物や物の心や思いが分かるのよ。だけど、不思議ね。あなたたちの心は読めない」
「それはきっと、『加護』よ。ということは、あなたたちは来るべくして、来た、と言うことかしら」
「どういうことだ？」
「『加護』っていうのはまあ、その人が持ってる特殊な力なのよ。こっちでもほとんどいないし、存在も知られてないけどね。だけど、向こうの世界では普通いないわ。だから、私は来るべくしてきた、て言ったのよ」
「なるほどね〜　まあ、今更よね。わたしはこれのおかげで強くなれたし。まあ、コンプレックスでもあったけど。あなたがいればもう良いし」
「まあ、そうだよな。今更だ」
「まあ、いいわ。ねえ、天？　あなたも使ってみて？」
「ああ、別にかまわないが」
天の瞳が翡翠色に変わる。
「ああ。どうだ？　俺はこれで相手の動きも読めるから、重宝してるんだが」
「あなた、どれくらい先まで分かるの？」
「はっきりしてるのは、本当にちょっとだよ。相手の動きが残像みたいに見えるんだよ。それよりあとは、どちらかと言えば予言とか占いに近い感じ。漠然としたイメージが見える。だいたい1ヶ月くらいかな。まあ、最初は精々1週間だったから、使い続ければもっと先までイメージがわくのかも知れないけど」
「そうね。だけど、見たところ魔力も使ってないし、不思議な力だわ。まあ、いいわ。それじゃあ、狩りにでも生きましょうか。こっちにいきましょう。〈石甲猪（ストーンボア）〉がいるから」
「ストーンボア？」

「そうよ。石みたいに硬い表皮に覆われてるのよ。大丈夫よ。銃弾や、矢に、貫く、と言うことをイメージしなさい。魔術にしても、宝具にしても、重要なのはイメージよ」
「そういえば、望む銃火器になるんだっけ。え～とストーンボアってのは、あの川のほとりにいる灰色の猪のこと？」
「はあ！？　あなた、ここから見えるの？」
「木が邪魔だけど、まあ、見える」
「あなたの目、絶対おかしいわよ。わたしだって鍛えてるけど、何にも見えやしないわ」
「夜目が利くんでな。ついでに視力は１２．０くらいでな、１キロ先くらいなら分かるよ」
「意味わかんない・・・あなたどこのマサイ族？」
炎奈の問いに天は苦笑で返す。
「まあ・・・よくないけど、いいわ。それでどうするの？」
「狙撃する」
ブリューナクは淡く発光し、その形をライフルへとかえる。ただし、その砲身は異様に長い。おそらく２メートルはあるだろう。
「さて、レールガンと同じまねごともできるみたいだな。便利だな魔力。おまけにそこまで重くもないし」
天はライフルを構え、スコープで覗く
「どれどれ、いくよ」
天が引き金を引く。銃弾は音も反動も無く放たれ、１キロほど離れたストーンボアの眉間を正確に貫く。銃弾はやがて、消滅し、空気中の魔力へと還元された
「すごいな、これ。音も反動も無いなんて」
「どう、やったの？　ていうか、それどこまで届くのよ。まあ普通ライフルは２キロくらい届くから、国家ら届くのはまだ分かるけど。明らかにそれはそれ以上飛ばせるのよね？明らかにその砲身は長すぎるもの。」
「ああ。これは向こうでの愛銃なんだ。このスコープと併せて１０

キロ先まで狙える。本当は音と反動が結構あるんだけど。魔力ってすごいね。ふだんは、ハンドガン使ってるけど。特注の」
「Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ６８６？」
炎奈が言ったのは銃の名前だ
「の特注版。よく分かったね」
「最初の銃がそれだったからね」
「いや、普通見ただけでわからないよ。まあ、いいや。ミレイユさん、殺したぞ。肉を取りに行こう。はらがへった」
「え？　あ、ああ。そうね」
ミレイユは少し驚き、そして３人で森へと入っていった。

第４話　初めての食事　日本かぶれの神様

――――――第４話　初めての食事　日本かぶれの神様――――――
３人はストーンボアの肉を家へと運び、焼いて食べた。ストーンボアの肉は、肉汁がまるであふれんばかりにしたたり、肉そのものの味は淡泊だが、ボリュームがあるという何ともいえない味で、３人の評価は
「まあまあかな」
「ちょっと肉汁が多すぎ」
「ひさしぶりに食事なんてしたわ」
順に、天、炎奈、ミレイユで、三者三様の反応を見せる。ストーンボアの余った肉は、干し肉にした。
「今日はもう寝ましょうか。地下に一応寝室はあるわよ。好きなところ使って」
「え～　お風呂は無いの？」
炎奈が不満を声に出す
「あるけど・・・あなたたちの着替えもないし、どうせ汗もあまりかいてないのだし・・・　わたしだって、タダあるってだけで、どうせ汚れないからあまり使ってないし」
「いいの！　入ることに意味があるの！　どうしてミレイユさんは女性なのにそう言うことに無頓着なのかしら・・・」
「あ～　はいはい。お風呂は、地下２階ね。こっちよ」
ミレイユが奥の扉を開ける。寝室かと思われたが、そこにあったのは地下への階段だ。
「地下１階は、寝室だから。好きなところ使って良いけど、一番奥の部屋はわたしの部屋ね。お風呂は、この下だけど・・・汚れても無いのに入るなんて、理解しがたいわ」
「わたしからしてみれば、ミレイユさんの方が信じられません。一体どれくらい入ってないんですか？」

「最近外なんてでてなかったし、そうね。1年くらいかしら」
「え！？　ちょっと信じられない・・・」
エンフィシアはミレイユを哀れむような目で見る。
「なによ！　だって、別に汚れないし、この体になってからは病気もかからないし、体も老廃物なんか出さないし、必要ないのよ！」
「まあ、いいわ。わたしは入らせてもらいます。天、覗かないでね」
「覗かねえよ」
「・・・・・・・チッ」
炎奈の舌打ちは誰の耳にも届かなかった
「そういえば、使い方は？」
「ああ、教えてあげるわ。ついてきて。ついでだからメアリエルくんも」
「あ、ああ。分かりました」
階段を下りる。地下1階をスルーしてそのまま地下2階へ。ちいさな廊下の奥に扉があり、開けてみれば、そこは大衆浴場のような脱衣所があった。
ロッカーや水道、ドライヤーまである。
「この世界はこんなに技術レベルが高いんですか？」
「いや、今は違うわよ。これはミールが自己満足のために作ったのよ。時々来て、お風呂に入っていくの。あの神様も相当な変わり者よね。まあ、ここにあるのは全部魔道具。魔術で温風を出したり、水やお湯を出したりできるのよ。どんな理屈か知らないけど。魔力だって普通は徐々に減るはずなのに、永久に使えるし。私たちの文明では割と珍しくもないけど、今じゃほとんど残ってないわ」
「驚いたな。始まりの文明は、僕たちと同じくらいの技術レベルだったのか。それに、どことなく日本に似てるのが気になるな・・・」
「そうね・・・同意するわ」
「まあ、いいわ。あとは中の説明ね」
引き戸を開け、中に入ると、そこはまさに温泉施設さながらで、熱めの湯やぬるめの湯、水風呂おまけにサウナまであり、シャワーも

現代に比べても遜色無いほどだ。しかもなぜか、ボディーソープやシャンプー、リンスやトリートメントまである。
「あ～　なんだか、あの神様が日本かぶれなのは分かったわ。どういうわけかは知らないけど。そういえば、こっちの文字は習ってないはずなのに、読めるわね。なんでかしら」
「たぶん、ミールがなんかしたんでしょう。あの方なに考えてるか分からない人だし。何でもできそうな人だし」
「考えるだけ無駄だ。なんせ異世界に来るなんて、とんでも事件に巻き込まれたんだ。何が起こってもおかしくは無いんだよ」
「それもそうね。それじゃあ、もう使い方も分かったし、ほら出てった出てった」
炎奈が、そういい、天達を追い払うような動作をする。天とミレイユは地下1階へと移動した。
「ここが、まあ居住空間ね。あの突き当たりの部屋がわたしの部屋だから。それ以外は自由に使って良いわ。一応中を説明しときましょうか」
ミレイユが、一番近いドアを開け、中に入るように促す。中は、まず、入ってすぐにかなり広めの空間に高級そうなクローゼットや小さな冷蔵庫、本のぎっしり詰まった本棚が壁際に設置され、真ん中に沈むように柔らかいソファとテーブルが置いてある。テーブルの上には気品さを感じられる花がこれまた上品な花瓶に挿されており、いっそう上品さと高級感を作り出している。
また、入ってすぐの右の部屋はお手洗いになっており、左の部屋は、物置だ。また、リビングの奥の2部屋のうち、引き戸で遮られていた部屋は、ダイニングキッチンで、引き戸を開ければリビングともつながり、開放感のあふれる空間を作り出す。キッチンには、包丁やおたまなどの基本的な調理器具はもちろん、なぜかミキサーや電子レンジ、オーブンのようなものまである。もはや意味不明である。さらには、大型の冷蔵庫や竈など、このキッチンと材料、レシピがあれば道具には不自由なく世界各国の料理を作ることができそうだ。

ただし、もちろん冷蔵庫の中身は何もは行っておらず、宝の持ち腐れなのは言う迄も無い。
続いて奥のもう1部屋、扉を開けると、そこは現代でもそうそう無い、天蓋付きキングサイズのベッドだ。もちろん眠り心地はすばらしい。おまけに、全室、光度を自由に調整できる魔法の照明がついており、地下だから薄暗いと言うことは全くない。むしろ夜でも昼のように明るい。魔道具様々が。
「信じられん・・・」
風呂場に続いて、部屋まで現代の高級ホテルよりもよっぽど設備が整ってるのを目の当たりにしメアリエルは普段顔には出さない驚きを隠せない。
「普通、異世界と言えば、中世ヨーロッパみたいな感じだよな。なんでこんなんなんだ」
「ミールのやることに一々驚いていてはだめよ。わたしだってあきらめたんだもの」
ミレイユはどこかあきれたような顔でそうつぶやく。
「あ、ああ。そうだな。ああ。ひとまず、使い方も分かるし。うん。俺は今日は寝ることにする。お休み」
「え？　ああ。はい。お休みなさい」
ミレイユは照明を消し、部屋をあとにする。天は、着替えも無いので、そのままベッドへとダイブし、意識を沈めていく。

第5話　お互いに望んでいたもの　人の支え　寝室にて

――――――第5話　お互いに望んでいたもの　人の支え　寝室にて――――――

翌日、起きてみればなぜか隣には炎奈が寝ている。天は何故だ・・・とぼやきつつも、同年代の女子が同じベッドで寝ているという事実を受け興奮し、もう少しだけこのままでいたい、と言う欲望と彼女を起こさなくては、と言う理性の訴えに板挟みにされその心を悩ませている。

「ん・・・うん・・・　ああ、おはよう、天」

結局その悩みは炎奈が起きるといういわば時間切れのような結末によって解決された。

「ああ、おはよう。炎奈。何故僕のベッドで寝てるんだ？」

「昨日、お風呂から上がってあなたの部屋に来て、あなたのベッドで寝たから？」

「なるほど。当たり前のことだが、考えてもなかったよ。僕が聞きたいのは、何故そんな行動に出たのか、ってことだ」

「そうね・・・　まあ、あなたがほしいからよ。そしてあなたを奪われたくないから。あなたは夫婦が同じベッドで寝ることが多々あることは知っているでしょう」

「だけど、残念なことに僕と君は夫婦でもないし、確かに同じ考えや価値観を共有しているかも知れないけど、そもそも恋人ですら無い」

「考えと価値観を共有していて、お互いの存在が意識できるほど近くにいるのならば、それは徐々に友人を経て恋人へと変化し、やがては夫婦という関係になるとは思わない？　夫婦の仲や、その後離婚するかどうかはまた別の問題として。それと、あなた昨日と若干性格が違う気がするけど、昨日のあれもやはり演技だったのかな？

あなたやっぱり他人を信じないタイプなんだ。もしかしてそれも

演技？」
「・・・ここまで僕と同じ考えの人は初めてだよ。僕は別に演技をしているわけじゃ無い。仮面をかぶってるんだ。何枚も、何枚もね。そして同時に酷く嘘吐きなのさ。何も関係の無い、自分に利益も無いことで嘘をつくことだってあるし、嘘と言ったことが実は本当と言うこともある。そして何より、僕は自分にだって嘘をつける。僕はこういう人間だ、と嘘をつけば、僕はその通りになれるだろう。ただし恋愛感情だけは無理だな。僕がどんなに誰かを好きになろうと嘘をついても、それはやはり嘘だと自覚してしまうよ。他の嘘なら、自分にだってばれやしない。自分がこう言う人間だった、と気づくその瞬間まで僕自身気づいたりはしない。もしかしたら、それも嘘かも知れない。だけど、僕の根幹には大元の人格があるし、その人格を元に様々な仮面が生まれる。この性格も仮面の１つだよ。下から何枚目くらいかな・・・昨日の仮面よりは下だろうね。もしかしたら、最後の１枚かも知れない。そんなことは僕自身にも分からないけど。それから、長くなったけど１つ訂正するよ。僕は人間を信じないんじゃ無い、信じられないんだ。どんな他人の言葉も信じようとは思わないだろうね。僕が人の言葉を信じる、というのはおそらく相手が、本当の恋人だった時くらいだろうね」
「驚いたわ。あなた、随分と考え深い人だったのね。それで、わたしのことは本当の恋人にはならないのかしら？」
「僕の恋人の条件ってのはいくつかあるんだよ。君は３つのうち２つはクリアしてるといえる。１つめは僕の考えを理解していること。２つめはお互いの悩みへの過干渉をせず、しかし、お互いを慰め合うことができること、３つ僕が最低な人間であることを理解し、なおかつ僕とともにいても良いと思えること。この３つだ。君はたぶん１つめと３つめはできてると思う。僕が気になるのは２つめだ。これができるんなら、君は僕の恋人にも妻にもなれるだろう。そして僕が唯一素顔を見せる人間になるだろう。君は、この３つに当てはまることができるかい？」

「なれる。だけど、これをあなたに言ってもわたしのことはどうせ、信じられないんでしょう？」
「ああ、そうだよ。・・・・・・本当に君は、僕のことをよく分かってる。信じない、信じられない。だけど、信じられなくても素直に感動しても良いよね？　泣いて良いよね？　だって君は僕にとって救いみたいなものなんだから」
「ええ、いいのよ。むしろ私たちは泣くべきなのよ。人間は本来支え合って生きていくんだから。本当の意味で支えになってくれた人なんていなかったんだから・・・」
2人の目には自然と涙が浮かび、2人はお互いを抱き合い、ベッドの中で静かに泣いた。お互いに何故泣くのかは問わず、ただ静かにお互いに泣き、慰め合い、今までの分を泣き尽くした。
お互いに泣き終え、抱き合ったまま一時の沈黙が続く。それは、心地のよい沈黙であった。やがて無言のまま、2人の唇は、どちらがしだすでも無く自然と重なり、優しくキスをする。
そんなことが何度か続き、やがて、舌を相手の口へと運び、ディープキスへと徐々に変わる。お互いの息遣いしか聞こえぬ寝室の沈黙は、唐突に破られた。
「おっと、お楽しみ中だったか、失礼しました」
ミレイユは、寝室の扉を開け、中を確認して扉を素早く閉める。
2人は、驚きと恥ずかしさのあまり、お互いに突き放してしまい、天にいたってはベッドから落ちてしまった。
「「あ・・・・・・」」
「え・・・と、大丈夫？　天」
「う・・・うん。そっちこそ大丈夫？　炎奈」
「ええ・・・ひとまず出ましょうか・・・」
「あ、ああ」
2人ともベッドから出て、服装を整え、寝室から出る。ダイニングには、朝食と思しきストーンボアのベーコンのようなものが用意されている。

「おはよう。昨夜はお楽しみでしたね」
「「違う！」」
「いいのよ。２人はまだ若いんだし。こっちの世界なら結婚適齢期だし、何の問題も無いわ・・・」
ミレイユが、２人のことを誤解し、その誤解を解くために奮闘した２人は朝食を食べたことも忘れるくらいに疲れたという。

第６話　異世界の常識　魔術と精霊

――――――第６話　異世界の常識　魔術と精霊――――――

「それじゃあ、まずこの世界の常識については、ちょっとずつ教えるとして、１年の内訳と簡単な地理とあとは貨幣価値くらいを押さえておきましょうか」

ミレイユの説明が始まり、２人とも耳を傾ける。

この世界、アンヴァレンは１つの大陸と、その周りにある諸島から成り立っており、このほかに陸地は存在しない。このことは船で旅をした冒険者によって証明されているらしい。

そして２４時間で１日が過ぎ、９日で１週間、３週間で１ヶ月になる。１年は６つの季節に分かれており、１つの季節は３つの月で成り立つ。

季節は順に、創造の季、大地の季、豊穣の季、人の季、魔の季、絶望の季に分かれ、日付は創造の１の月の１３、豊穣の３の月の１７などと表される。

通貨白金貨、金貨、銀貨、銅貨、鉄貨、石貨で、左から順にだいたい１億円、１００万円、１万円、１０００円、１００円、１０円の価値がある。

平民の一般収入は月に銀貨２０枚程度。

ここはアンヴァレン大陸の中央に位置するオーグドン国の南部にある時の森という場所らしい。ちなみにどの国も政治体制は貴族制らしい。

「――――とまあ、こんなところね。さて、それじゃあ午前中は街で買い物をして、午後からは魔術について教えましょう」

３人は、ミレイユの転位魔術によって、オーグドン国の帝都アールンブグへと転位した。町並みはまるで中世ヨーロッパのようだ

「さて、まずは服と食料と生活必需品ね」

3人は、服や、今後1ヶ月程度の食料、食器などの生活必需品を購入し、ついでなので、防具も見繕うことにした。
今はミレイユの行きつけの店であるという武具店に来ている。少し狭い裏通りにあるが、知る人ぞ知る名店らしい。
「おや、ミレイユじゃねえか。後ろのガキは」
「わたしの期待の新人達よ。そうね、あなたたち、どんなのがほしいの？」
「それじゃあ、僕はなるべく軽くて動きやすい防具が良いです。あとナイフがほしいですね」
「わたしも動きやすいのが良いわ」
「それじゃあ、まずは革鎧でも試すか。こっちだ」
店主のおっさんについて行くと、革鎧が並べられているあたりに連れてこられる。
「ふん、コイツはどうじゃ？　儂の店の一番の品じゃよ。魔術への耐性の強い黒魔狼の皮を何層にも重ね、縫うために魔術耐性の高いミスリルの糸を使ってる。これならサイズも兄ちゃんにはぴったりだろう」
店主が持ってきたのは、漆器のように黒い革鎧で、試着してみたところ、動きにくさも特になかったので、これに決定した。
「嬢ちゃんには、そうだなあ・・・」
店主が炎奈に見繕ってる間に、天は短剣のある場所へと移動し、品定めをしていると、その中に1本だけ気になるものがあった。
「そいつに目が行くとはお目が高いな、兄ちゃん」
いつの間にか店主は炎奈の相手を終わっていたようで、背後から声をかけられる。エンフィシアはどうやら黒の武闘衣（魔術刻印によって防御力などを上げている衣服。革鎧などに比べて高価）に決めたようだった
「いえ、ちょっと目が行ってしまったので」
「そいつは月魔狼の牙を砕いて刀身にコーティングしてあるんだ。そのおかげで魔導率も非常に高いし、壊れにくい。刀身もミスリル

でできてるから魔導媒体としても使えるぜ？切れ味も保証できる」
「じゃあ、こいつにするよ」
「決まったわね。会計よ」
「全部で締めて金貨８枚と銀貨７２枚だな」
「分かったわ。はい」
ミレイユは袋から金貨８枚と銀貨７２枚とりだし、店主へと渡す。
「・・・確かにいただいた」
「じゃあ、ご飯でも食べて帰りますか」
店を出て、表の大通りへと歩を進める。まだ少し昼食には早い時間だが、昼食時は多すぎてとても混雑する上にどの店も１時間待ちになるそうだから、まだすいている今ぐらいから行くのが正解だったりするのは、どの世界でも変わらない。
「そういえば、ミレイユさん、どこからそんなにお金出してるんです？」
天はふと疑問に思ったことを口に出す。
「え？　あれは袋の中で魔法でお金を作ったのよ。わたしがお金なんて持ってるわけ無いじゃ無い」
「え・・・？」
「まあ、こんなことできるのは魔法だからよ。魔術じゃできないから、残念だったわね」
「え～と、話がよく分かりません・・・」
「まあ、その後は帰ってからにしましょ」
３人は適当な店で適当なものを頼み昼食をとった。ペペロンチーノのような物や、ミネストローネのような物、チキンソテーのような物だった。この世界でも調味料は割と充実しているようだったし、現代とあまり変わらないものだった。食費は３人で一食銅貨２枚半程度で、値段はリーズナブルだ。３人は満足した様子で誰にも見られないような場所で転位魔術を使い帰路へとついた。

「さて、それじゃあ、まずは魔術の基本的なところから教えましょうか」
そう言ってミレイユは魔術について講義を始める。
「魔術とはわたしが持つ神の力の断片『魔法』を私が人間でも使えるようにし、さらに体系化した物です。魔術は大きく『詠唱魔術』『陣魔術』という2つに分類される他、魔術に属性があり、数が多い順に火術、水術、風術、土術、氷術、雷術、金術、光術、闇術、心術、時空術、という11の属性からなる『属性魔術』と『無属性魔術』の2つ分けることもあります。自力で魔術を発動させるための条件はまず魔力があることが条件です。通常、適正は後述する精霊によって決まり、無属性はほぼ必ずあり、そのほかに属性魔術を多くて2つ、宮廷魔術師などでもせいぜい3つ、4つと言うところです。現在時空術と心術は圧倒的に数が少なく。世界で合わせて3人しかいません。ただし、このうち1人はあなた方と同じく向こうから来た方ですが。では、次に詠唱魔術と陣魔術について説明します。詠唱魔術とは、そのまま決められた言葉を詠唱することによって発動します。ただしこのときに唱える言葉は現代語であるより古代語であった方がより正確に強力なものを放てます。ただし、古代語は発音も難しいため、簡単に習得できる物ではありません。また、高位の魔術師になれば、詠唱は必要ありません。これは魔術発動のためのプロセスにもなりますが、詠唱とは本来自らのイメージを具体化させることにより、思い通りの現象を起こすための補助なので、頭の点より正確に明瞭にイメージができれば問題ありません。次に陣魔術ですが、これはあらかじめ魔術陣を用意しておきそれに魔力を込めることにより発動させます。これはあらかじめイメージを魔術陣に起こしている物なので、魔力を魔術陣を通して精霊に伝えられれば問題ありません。利点としては、より早く強力な魔術が撃てることです。こちらも高位の魔術師になれば、魔道具を使い、その場でいくつも魔術陣を構築して発動すると言ったことも可能です。

魔術陣の構築は自らのイメージを式に一度変換しているので無詠唱魔術に比べて若干ロスタイムがありますが、効果の調整がたやすく、より細かく精密な魔術が発動できたり、あるいはプログラムを組むことにより、延々と発動させ続けたりすることができたりと、利便性の上では上といえます」

「1つ質問があるですが」

「なんでしょうか、メアリエルくん」

「精霊、とはどこにいるんですか？」

「良い質問ね。精霊は、魔術師が魔術師になるために、精霊界から召喚し、契約する使い魔のような物です。高位の精霊は人語を解し、もしもそれを召喚できれば無詠唱魔術でもほぼ正確な物になり、さらには自らの意思で契約者を守ったり、あるいは魔術の威力を増幅させたりと様々な恩恵があります。ただし、どんな精霊も基本的には人間と思考回路が違います。たとえば大河が目の前を流れていて、向う側に渡りたい時、向う側に渡りたい、とイメージすればおそらくは転位や、風魔術の類いで渡るかも知れませんが下手をすれば、川を全て凍らせる、あるいは川を全て蒸発させる、最悪は川の流れを変える、といったことになります。だから、イメージとはより正確で無ければならないんです。ただし、精霊もほとんどは契約者の魔力を使うのでよっぽど魔力が高いか、あるいは精霊自身がかなり高位で無ければ、いけませんが。また、精霊の中でも人間と比較的なじみ深く、思考回路のにた精霊もいますから、そういう精霊を召喚できれば、ラッキーと考えて良いでしょう」

「精霊にはどんな種類が？」

「意思のない下級精霊、少しの意志がある中級精霊、それでいて力の強い上級精霊、さらに上には神獣と言われ、この世界に自力で顕現することができるほど強力な神獣がいます。神獣はよっぽど魔力が高くなければ召喚できず、あなた方の先輩とあとは現代ではオーグドン帝国の竜人王が下位竜をファーレイン国の女王がユニコーンを召喚し、契約しています。彼らはともに人語を理解することはで

きますが話すことはできず、姿を変えることもできず、神獣としては下位にあたります。さてでは実際に召喚してみましょうか。あなたたちの魔力はわたしを持ってしても測定不能なほどですから、果たして何が出るやら」
そういってミレイユは袋から魔術陣の書かれている紙を2枚取り出す。
「ここでやられてはかないませんからね。外でやりましょう」
3人は外に出て、天と炎奈は紙を地面に置く
「それじゃあ、わたしの後に続けて詠唱してください。『神代の時代に生きし者よ、我、汝を召喚せりものなり』」
「「『神大の時代に生きし者よ、我、汝を召喚せりものなり』」」
「『大いなる大罪の償い、かの者との契約により、汝今こそ我の元に現れ、契約の義務を果たすべし。汝、我無くしては生きることかなわず、我、汝無くして生きることかなわず。血の盟約により古の時を刻む者よ彼の地より顕現せよ』」
「「『大いなる大罪の償い、かの者との契約により、汝今こそ我の元に現れ、契約の義務を果たすべし。汝、我無くしては生きることかなわず、我、汝無くして生きることかなわず。血の盟約により古の時を刻む者よ彼の地より顕現せよ』」」
唱え終えた瞬間に魔術陣は青く発光し、回転し、魔術陣だけが紙から離れ空中でなおも高速回転と発光を続け次第に魔術陣の面積が拡大していく。
「これは発見されるとまずいわね。『結界』」
「今何を？」
「見られるとまずいから、光学屈折と、魔力遮断の結界よ」
「なるほど」
魔術陣の発光がより強まり、最高に達したと思われた時、魔術陣は砕け、2つの魔術陣から2つの影が現れる。
空には2つの巨体。1つは漆黒の竜。全長100メートルはあるその巨体は背中に持つ2つの翼を羽撃くでも無く空に浮遊している。

１つはまさに火の鳥。漆黒の竜とほぼ変わらないその巨体は深紅の羽毛に神々しい炎をまとわせ、６枚の翼を用い空を滑空している。やがて２体の巨体は輝き、人型になりゆっくりと降りてくる。
「あなたたち、これでもあまり魔力減ってないわよねえ。せいぜい半分くらいかしら」
「一体俺たちは何を召喚したんだ？」
「精霊には位があるのよ。下級精霊から神獣まで。契約の時に分かるけど。それで、だいたいの自分の強さも分かる。普通は召喚したあとは魔力切れでほとんどぶっ倒れるんですもん。だけどあなたたちにはそれが無いから、魔力の底が知れないわ。あなたたちが召喚したのは―――」
「妾達のも自己紹介の時間くらいよこさんか、ミレイユ」
「そうだぜ、全くだ」
そう言ってミレイユの言葉を遮ったのは身長２メートルはあり、容姿は地につくほどに長い深紅の髪と、ルビーのような瞳、整った顔つきは男女を問わず１００人が１００人振り返るであろう顔をしており、深紅の衣を身にまとう美女と、漆黒の革鎧に身を包み、髪は銀色、瞳は黄金の３０歳ほどに見えるいかにも歴戦の武人という男性だ。
「・・・そうね。じゃあ、自己紹介してもらいましょうか」
「では妾からだな。妾は第１位の精霊、不死鳥である。主様よ、妾に名前と血をくりゃれ？」
そう言って不死鳥だった者は天へと名前と血を要求する。
「え～と、僕か。それじゃあ・・・フィン。名前はフィンだ。血はどうすれば・・・」
おもむろにフィンが天へと近づき、天の右手をとって人差し指を口へと運ぶ。
「え？・・・ッ」
「フィン。気に入った。妾は今からフィンじゃ。主様よ、なかなかによい血じゃった。主様にも妾の血が混じったはずじゃ」

フィンが口から離した指先はわずかに血がにじんでいる。しかし、血が出ているはずの傷はすでにどこにも無かった。
「主様の怪我は、妾の血の力を持ってすれば簡単に治すことができる。では、主様よちょっと失礼」
フィンは手を天の胸へと当てる。フィンはそのまま光の粒子へとかわり、天の体の中へと吸収されるように消えた。
（なかなか、住み心地はよいの。魔力も豊富じゃし、これでは妾の方が強くなってしまうかもしれん）
「メアリエルはこれでおわりね。どう？　体の中にフィンを感じられる？」
「ええ。僕の中はとても住み心地が良いそうです」
「じゃあ、あとはあなただけね」
「じゃあ、次は俺の番だな。俺は第2位の精霊、竜王だ。我が主炎奈、いや、エンフィシアよ。名前と血を頂戴したい」
「いやよ」
「え？」
「なんてね。まあ、むさいおっさんというのは許容範囲よ。1人はそういう人がいた方が舐められないですみそうだし。そうね名前はリンドよ。血は・・・」
「リンドか。いいだろう。別にあんことしなくても、お互いの血が交われば良いんだよ。指かしな」
そう言ってリンドは自分の指と炎奈の指に爪で浅い切り傷を突け、お互いの傷を合わせる。
「これくらいで良いか。さて、ではよろしくだな。我が主よ」
そういってリンドは光の粒子へと代わり、炎奈の中に消える。
（ちょっと、そんなの聞いてないよ？　僕だって恥ずかしかったのに）
（だけどうれしくもあったじゃろう、主様？　召喚したその瞬間から主様の感情は妾の感情。主様がうれしければ妾もうれしいし、主様が悲しければ妾も悲しい。あのとき主様はうれしかったはずだが

違うかや？）
（それは・・・そうだけど。じゃあ、なんで恥ずかしくないんだよ）
（それは主様があとから恥ずかしくなっただけじゃ。それに妾は恥ずかしくてもどうとも思わぬ性格なんじゃ）
（う～　まあ、いいや。うれしかったから許す）
（主様、大好きじゃ！）
（なにかありそうだ。まあ、いいや終わろう）
（そうじゃの）
「ひとまず、終わりだけど。・・・そこ、さっきから百面相しない。・・・はっきりいってもう教えることとかほとんど無いわよね。詠唱魔術は。その2人なら人間の考えも分かるし。人間の常識もあるし。別に無詠唱でも問題ないでしょうし。あ、1つ言い忘れてたわ。ふつう詠唱魔術を使う時は精霊に自分の意志を伝えるために魔導媒体が必要なのよ。実際には宝具でいいんだけど、宝具とか、魔導媒体の必要の無い精霊・・・と言うか神獣を連れてると警戒されるから、何か魔導媒体を持ってた方が良いわよ。メアリエルくんはそのナイフで良いけど。・・・そうねあなたにはこれあげるわ。ミスリルの指輪。それなりに高価だけど、一般的な物だし」
そう言ってミレイユは袋の中からミスリル制の指輪をとりだし、炎奈へと投げる。
「サンキュ。ふ～ん、これが魔導媒体ね」
そういって炎奈人差し指にはめる
「そういえば、ミレイユはフィン達のことを前から知ってたみたいな風だけど、そうなのか？」
「ええ、そうよ。何せ元々わたしといっしょに１０００年くらいはいっしょにあちこち旅してたもの。まだ、文明が滅んで間もない頃だけど」
「あ～　それでなんだ。え？　てことはミレイユは2人と契約してたの？」
「いや、2人は自力でこちらの世界に顕現できるからね。たまたま

知り合って一緒にいただけよ」
「へえ」
「さて、それじゃあ、陣魔術について教えましょうか。陣魔術はあなたたちの世界のプログラムみたいな物よ。それに用いる形式や、言語、それに魔術陣の形状は様々なものがあるわ。あなたたちにはこれを渡しとこうかしら。魔術陣を自分の魔力で展開するための道具。これがあれば即席で魔術陣がくめるわ。わりと魔術店にうってる物よ」
そういって、今度は腕輪を取り出し、2人へと投げる。
「陣魔術は精霊にこういうことをして、て言う命令を自動で出し続けたり、あるいはより正確なイメージを伝えるための物だから、完璧に精霊を意思疎通ができればはっきり言っていらない。精霊にこうこうこういうことをしといてと命令すればそれで終わりだったりするもの。だから、神獣を持ってる2人はほとんど詠唱も陣魔術も使わない。だけど、あなたたちには別の使い方ができるのよ。彼女達なら、上級精霊だって使役可能だもの。その精霊に指示を出すために彼女達を中継して精霊に陣魔術で指令を出せば火力はうなぎ登り。1国を1人で落とすのも夢じゃ無いわね。まあ、基本的には契約している精霊は使えないけど。だから、覚えてそんじゃ無いわ。と言うか、私の仕事が無くなるから覚えなさい」
こうして、夜が更けるまで延々と陣魔術の講義は続いた。

第６話　異世界の常識　魔術と精霊（後書き）

８／１５　詠唱魔術についての矛盾を修正
８／１６　王都→帝都に変更
８／１７　ラーンの王国からオーグドン帝国へ変更

第7話　魔術適正と規格外　別れと2年後

――――――第7話　魔術適正と規格外　別れと2年後――――――

結局夜まで延々と陣魔術に関する言語、構築理論、陣魔術の発動プロセス、魔術陣同士の連携、条件付けされた魔術陣の構築、魔術を自動で動かすための指示言語をたたき込まれ、精神的な疲れから2人が解放されたのは夜遅くのことだ。2人は順番に風呂へ入り、簡単な軽食を食べ眠った。

翌朝。またこのパターンだ。天の隣には深紅の髪の女、すなわちフィンが寝ている。

「なぜ、隣で寝ているんだ？　フィン」

「うむ。それは妾が朝起きたときに隣で寝ていれば驚くだろう、と思ったからじゃ。しかし反応はつまらんの。驚きこそわずかじゃし」

「昨日も同じようなことがあったからな。さすがに2回目にもなればなれる。まあ、元に戻れ。あいつらがまた来るだろ」

「妾は別に見られてもよいのじゃが。主様の頼みでは仕方ないの」

フィンは光の粒子へとかわり、天の体内へと消える。ちょうど良いタイミングで、扉が開いた。

「おはよー、天！」

「ああ。おはよう」

「なんだ、起きてたのね」

「残念ながら・・・な」

「朝食できるわよ」

「了解」

朝食ができたことだけ伝えると、炎奈は扉を閉め、部屋の外に出る。少しして階段を上がる音がわずかに聞こえた。天は着替え、革鎧とローブを着て1階へと上がる。

机の上にはパンのような物のトーストと、目玉焼き、ベーコンというごく普通の朝食が並べられていた。簡単にあいさつを交わし、3

人は朝食を食べる。食べ終わると炎奈が片付けをリンドに任せ3人は外に出る。
「さて、今日はいよいよ実践篇だけど、その前にあなたたちの適正を調べておくわ」
「あれ？　神獣は全て適正があるんじゃ？」
「それは、神獣が、よ。人間にも適正はあるわ。これが無いと精霊は使えるから、陣魔術は発動できるけど、詠唱魔術は使えない、ってこともあるのよ。詠唱魔術ってのは陣魔術とは違ってあくまで自分で、自分の魔力を使い、精霊を介して、世界に介入する力。それに対して陣魔術は自分の魔力で、魔術陣というプログラムを動かし、それに応じて、精霊が、世界を操る力。似て非なるモノだし、詠唱魔術はあくまでも自分の力で行う物だから、適性は必要になるのよ。というわけで、これ。魔力を流せば、適正が分かるようになってるわ。さらにそれだけじゃ無く、どの位得意かも分かる優れものよ」
ミレイユは水晶玉のような物を投げてよこす。2人は魔力を水晶玉に込めると、水晶玉になにやら模様が浮かび上がった。
「どれどれ、見せて・・・・・本当にあなたたち規格外ね」
「え？　どうだったんです？」
「まず、メアリエルくんは・・・ひとまず心術以外全部使える。全てに適正ありね。中でも得意なのは風、金、時空術。時空術の適正値は異常ね。で、次にエンフィシアは、時空術以外全部つかえて、おまけに全部得意のようね。中でも異常に適性が高いのは心術。君たち意味不明。何このインチキ。壊れちゃったのかしら。・・・まあ、そうね。これでわたしからは1ついえることがあるわ。これは推測だけど、たぶん君たちの『加護』がこの異常な適正値を出してるのよ。『加護』様々ね」
「え～　心術と時空術って使える人少ないんだよね。隠してた方が良いかなあ」
「そうね。無駄に争いたくないんなら。それにあなたたちなら魔力量のおかげで、どの属性でも宮廷魔術師のゆうに数百倍は強いわよ。

さて、じゃあひとまず使ってみましょう。『離別』」
空間がゆがみ、とたんに別空間へと飛ばされる。
「ここなら、基本的にどんな魔術を使っても大丈夫よ」
「じゃあ、そうね。『荒狂う業火　煉獄の火　断罪の火　乱れる火炎』」
「適当な詠唱ね」
その瞬間、周りにはすさまじい火の海が広がる。そこはまるで、在任の魂を浄化する煉獄のようである
「うわあ。　じゃあ次は僕か。あえて、複合魔術かな。『荒れ狂う風　吹き荒れる雨　とどろく雷鳴　暗闇の雲　嵐の海』」
今度は、たちまち暗雲が立ちこめ、高さ数十メートルはある津波が押し寄せ、たちまち暴風が吹き荒れ、雷が鳴り、そのなかを先ほどの火が次々に水を蒸発させるおかげで、一瞬で海は熱湯になった。
「「『浮遊』」」
2人は、空へと逃げる。ミレイユの周りには何故か、火も水も嵐の雲すらも無いので、そこへと降り立った。
「初めてにしては中々だけど、ちょっと威力強すぎよねえ。戦争でもするなら別だけど。おまけに魔力は全然減ってないと。さて、そろそろ消しなさい。魔力の流れを止める感じにすれば消えるから」
2人は言われたとおりにする。そうすれば一瞬で嵐は無くなり、火の海は消失した。
「そうね。あとは無属性魔術かな。いわゆる治癒魔術、身体強化、あとは結界とかね。あとは望遠とか。暗視とか。べんりなの満載。他の属性については、君たちの精霊に聞けば教えてくれると思うけど。そうね、1つ言っとくとしたら、時空術と心術は周りには絶対に教えない方が良いわよ。時空術は使うんなら精々空間関係ね。こんな風に異空間作って中にいろいろ詰め込んだり、その中で野営したり、転位したり、あと最強なのは時空術の結界ね。無敵。外部の攻撃全部遮断とかできるから。さて、無属性魔術。君達になら超簡単。自分の身体能力が上がったところを想像したり、夜目が利くの

を想像したり、怪我が治るのを想像したり、病気や毒が無くなるのを想像するだけ。普通なら精霊は融通が利かないから、これだけじゃ大変なことになるんだけどね。身体能力はあがったけど、そのおかげで力に耐えられないで、筋肉切れるとか、夜目が利きすぎて目が痛くなるとか、怪我は治ったけど、骨があらぬ方向のままつながるとか、病気や毒は原因の物質が聞かないから、何の意味も無いとか」

「まさに高位精霊様々だな」

「そうなのよ。だから簡単」

「じゃあ、『身体強化』　これだけで良いのか」

「そうよ。これであなたは自分が放出してる魔力量に応じて、身体能力はうなぎ登り」

「・・・っと」

天はジャンプすると、その体は言うに３０メートルは地上から離れた。そして、そのまま重力に従い降下し、音も無く地上へと降り立つ

「わーお。凄いなこれは」

「わたしは『暗視』できるよぉ」

「じゃあ、次はいよいよ陣魔術ね。昨日教えたことは覚えてるでしょうね？」

「あれを一日で忘れられれば苦労しないよ」

「全くね」

「じゃあ、何でも良いから使いなさい」

「それじゃあ、わたしかな」

炎奈は腕輪をつけた右手を動かしながら、魔術陣を構築していく。魔術陣は球状に展開され、光り輝くと球の中心へ無数の火の槍が射出され続ける

「こんなモンかな」

「あなたたち、本当に大魔術好きね」

「じゃあ、次は僕か。１つ確認ですけど、この世界のゴーレムは、ほとんど土術、金術の魔術師が自分で操ってるんですよね」

「ええ。そうよ」
「それじゃあ、『金術、ゴーレム生成』」
とたんに高さ１０メートルはある鉄製の巨大なゴーレムを作り出す
「それじゃあ、ただの詠唱魔術よ？」
「これからです」
そう言って天は魔術陣をゴーレムの頭部へと展開していく。その紋様は細かく、精密で、敷き詰められている、と言う表現がぴったりなほどの密度だ。そして、その魔術陣の他に、間接に当たる部分に魔術陣が構築され、最後にそれらを糸のような魔術陣で結ぶ。
「え？　これって」
「そうだよ、炎奈。自律起動型のゴーレム。いやロボットかな」
「ロボット　？　どういうものなの？」
ミレイユはロボット　という言葉が分からず、天へと質問する
「これは、相手の反応や、動き、あるいは数などを見て、自分で判断し、攻撃します。また、必要となった場合、自動的に金術を発動して、武器や盾を生成、また同じように必要なら魔術を行使します」
「うん、分かったわ。そんなことができるほど精密な魔術陣をこんなに短時間でくめるのはあなただけよ。おめでとう」
「何故か、全然ほめられてる気がしません」
「ほめてないもの。そうね、これでわたしの教えることはおわりね。あなたたちは街に出てギルドにでも登録しなさい。まだ計画が動き出すのに2年あるわ。この2年であなたたちはこの世界での生き方や、この世界の交流といったものを知ることになる。そして2年後来るべき時にあなたたちは出会い、そして行動するわ。わたしからいえるのは今はこれだけ。何時でも戻って来て良いわ。出発は明日かしら」
「「え？」」
天も炎奈も驚きの声を上げる。
「ミールから言われてるのよ。あなた達はここから出て、広い世界を体験しないといけない。わたしは、あなたたちに最低限のことを

教えてあげることしかできないわ。時が来るまでね」
「さっきからその時ってなんだ？　２年後に何かあるのか？」
「それは今はわたしからじゃいえないわ」
「そう・・・ですか・・・」
「じゃあ、今日は、パーっといきましょうか」
ミレイユは術を解き、もとの小屋の外に戻る。周りはすっかり夜であった。３人は、どこから取り出したのか、ミレイユの持ってきたワインを飲み、食べまくって、風呂に順番に入り、寝た。

第7話　魔術適正と規格外　別れと2年後（後書き）

8／15　魔術適正について加筆、修正

第8話　別れ　ギルド　帰らずの谷

――――――第8話　別れ　ギルド　帰らずの谷――――――

「それじゃあ、そろそろお別れですよ」

「ちょっと待ってね。あなたたちの魔力が凄いから、魔力誤認の魔術刻印を入れるから。ローブに。『刻印』はい、おわり」

「何故そんなことを？」

「あなたたちの魔力はただでさえ多いんだから、周りから見たら脅威の対象になるかもしれないからよ。まあ、敵う奴はいないでしょうけど。それから、ギルド登録するんならファーレインが良いわ。わたしの紹介状もあるし、何よりあそこは大陸中の種族が集まるもの。この国は生憎人間の国だから、滅多に他種族に会うこともないし」

「1つ質問なんだけど、ギルドは国をまたいだ物なのに、別の国で登録する意味あるの？」

「そうね。確かにそうだけど、国によって微妙にギルドのルールとかが違うこともあってね。あとは連帯感とか、その土地に住む冒険者達の性格とか。まあ、あとはあの国がギルドでも有名なパーティ『黄昏』が拠点にしてるからね。あのパーティはギルド全体でも屈指のパーティランクSだし。それにあそこのリーダーは『グラン・オーダー・ランゲ（秩序を重んじる偉大な冒険者）』だからね」

「そのグラ・・・何たらってのはなんですか？」

「これは一種の称号みたいなものよ。ランクSになったときにギルドから与えられるの。それに彼は宝具の持ち主でもあるし。まあ、だけど宝具なんて、ランクA以上なら10人に1人くらい持ってるわよ。確かに同パーティに2人は珍しいかもしれないけど。と、言うわけで、極力人のいるところでは宝具は使わない方が良いと思う」

「わたしの弓は便利な収納機能は無いんだけど」

「その袋に入れときなさいな。あと、メアリエルくんは銃は普段は

金術でミスリルとかから生成した方が良いわよ。イメージすれば作れるし。弾は普通に魔力で良いでしょ。まあ、宝具ほどの威力はえられないでしょうけど、普段の武器としては困らないわ。たしか、あなたは棒術も使えるのよね」
「まあ、一通りやらされましたし、剣とかを普段から持っとくわけにも生きませんでしたから、一番使える武器は銃の次は棒ですね」
「じゃあ、これあげる。銃の生成の材料に使うと良いわ」
そういい、ミレイユは袋からミスリル製の2メートルほどの棒を取り出す。細かい紋様が刻まれているが他には何も無く、とてもシンプルな物だ。
天はそれを受け取り、自分の袋へと収納する。
「エンフィシア、あなたにはこれを」
ミレイユは袋から一つの長弓を取り出す。
「エルフの古い友人からもらった物よ。これは魔力を矢にするマジックアイテムだから。これを持っときなさい」
「そんな大事な物・・・ありがとうございます」
「それじゃあ、送ってあげるわ。ファーレインの王都に送るから、ギルドに行って、さっき渡した紹介状を見せなさい」
「「短い間お世話になりました」」
「いいのよ。『転位』」
2人は淡白い光に包まれ、ミレイユの前から消失した。
「お疲れ様です。これであとは2年後ですね」
いつの間にか隣には青年がたっていた
「そうですね。これでよかったのでしょう？」
「ええ。うまく導かないと、またやり直す羽目になる」
「わたしには関係ないけどね」
「そうですね。・・・では僕にも仕事がありますから」
隣の青年は音も無く消えた。あとにはどこか寂しげな半神だけが残るのだった。

転位した天達はファーレインの王都ミルアージュの裏通りにいた。
「（主様よ。これからは妾達も人型になることもおおい。いっしょに冒険者として登録すればいろいろ楽じゃと思うんじゃ）」
「（・・・・・・それもそうか。じゃあ、ここで実体化しよう）」
「（うむ）」
天の横に深紅の髪の美女が実体化する。
「なにしてるの、天？」
「いや、これからフィン達も人型で行動することもあるかと思ってな。いっしょに冒険者として登録しとこうと思うんだ」
「いいわね。リンド」
「ああ」
炎奈の横にはリンドが実体化する。
「それと、２人以外の時はメアリエルって呼んでね」
「あなたもちゃんとエンフィシアって呼ぶのよ」
「分かってる」
４人は裏通りから出て、ギルドへと向かう。ミルアージュはまさに水の都だった。王宮へと続く大通りには緩やかな川が流れ、そこからいくつかに枝分かれし、主要な通りを作る。
並び立つ建物は大理石のような物でできており、また王宮は水晶でできていた。
「凄いわね」
「ああ」
「この程度で驚いていてはとても精霊界の我が家にはこれませんぞ、主様よ」
「おまえの家は豪華すぎる気がするがな」
「そもそも、僕たちが精霊界に行く何てできるの？」
「主様達の魔力、そして主様の魔術があれば同じ世界にある精霊界とつなぐなど造作も無いことぞ。精霊界や魔界は同一世界の別次元空間なのじゃから」
「へ～　と、見えてきた。あれがギルドだ」

大理石でできた2階建ての建物。看板には『冒険者ギルド』と書かれている。
中には多種多様な種族の冒険者がたむろっており、4人を観察する者、まだガキじゃねえか、とからかう者など様々だ。しかし、中には救いようのない馬鹿もいた。
「なあ、姉ちゃん達？　こっちで遊ばねえか？　そんなむさいおっさんとしけた坊主じゃ無くて俺たちで遊ぼうぜ？」
「妾は主様がおるから必要ないの」
「わたしも結構よ」
「なんだ、いいじゃんかよ？　お嬢ちゃん」
そう言って下卑た笑みを浮かべる3人の男のうち1人がフィンの腕をつかもうとする。
「すまんの。妾は豚には興味が無いのじゃ。おっと、そんなことを言っては失礼だったな。豚に。豚様は妾達の食事になってくれるすばらしく敬われる者であった。おお豚様よ。見かけがそのままだからと一緒にした妾を許してくりゃれ」
フィンがわざと挑発するように言う。
「な・・・なんだと！　俺たちがパーティランクC『ツーコンボ』だって知ってるのか！」
「知らんの」
「この」
3人はついに怒りを爆発させ、腰に差した剣を抜く。
「ふむ。基本的に冒険者同士の喧嘩にギルドは関与しない、じゃったか」
「この」
1人がフィンへと斬りかかる。だがその剣はフィンには届かず、剣は液体になるまもなく昇華した。
「ふむ、すまんの。剣をだめにしてしまったようじゃ」
「この！」
2人目の男が飛びかかろうとした。

「フィン、遊びすぎだ。さて、そこの3人。これ以上やるなら僕が相手になるけど」
天が殺気を出す。それは普段の天からは考えられないほどの殺気で、一瞬にしてギルドの空気を一変させ、傍観を決め込んでいた冒険者も思わず自分の武器に手を掛けるほどだ。
「この小僧！　なめた口をききやがって」
3人のうち1人が震えている体を奮い立たせ口にする
「そう、ですか」
再び空気が変わる。天の瞳からは鋭い眼光は消え、代わりに何も無い絶望によって彩られる。絶望によって室内は支配され、歴戦の冒険者も身の危険を感じていながら武器を抜くことはできず、新人の冒険者はふるいのあまりしゃがみ込む。これに刃向かってはいけない、人間の生存本能に直接訴えかけられる恐怖を生み出し、部屋には完全ある静寂が訪れる。
目の前にいた3人は恐怖のあまり腰を抜かし、失禁した者もいる。
「おい、坊主。そこまでだ」
不意に声をかけられ、沈黙は破られる。
「たしか、ギルドは冒険者同士の争いに関与せず、それがギルどないに及ぶ場合にのみ関与する権限を持つ、じゃったかの」
フィンが答える
「ああ。そうだ。ギルドの権限でこの場は引いてもらう。ギルドマスターの命令だ」
しかし、天は殺気をやめず、こう答えた。
「すいません。僕たちはまだ未登録なので冒険者ではありません。だからその権限は適用されませんよ」
「な・・・・・・」
周りからはざわめきが起こる。
「まあ、僕もやめようと思っていたところです。おい、お前ら、2度と僕たちに近づくなよ。僕の者に手を出した罪は重い。次は無いと思え」

そう言って、天は殺気を消す。
「すいません、皆さん。お騒がせしました。ギルドマスターさん、ちょうど良いところに。紹介状を預かってるんです」
「紹介状？」
「ええ。これです」
そう言って天は袋から紹介状を取り出す。
「ああ。・・・・・・おまえさんたちは今から、王宮へと来てもらう。そのあとで、ギルドに登録だ。いくぞ」
「「「「え？」」」」
「質問はあとだよ。こい」
ギルドマスターに促され、ギルドの外に出、そのまま王宮へと向かう。王宮へはギルドマスターの顔パスにより難なく入り、そして今から謁見の間に入ると言うところだ。
「ここだぞ」
扉が開けられ、中へと進む。中には宰相や、大臣と思われる人物が並び立ち、中央の玉座には女王が座り、その精霊であるユニコーンが隣にたっている。
天達は中へと入った。そして、誰が声を出すよりも早くユニコーンが天達に平伏する。
周りではざわめきが起きる。ユニコーンとは本来神獣であるため、プライドも高く決して顔を下げないのである。
「ふむ、人払いよ」
「しかし、陛下！　ガラム様はまだしも、危険です」
「2度言わせないでちょうだい、宰相」
「・・・っ　分かりました」
周りの大臣や兵士が部屋の外へと退室していく。
「隣から見ておる者がおるようじゃが良いのか？」
「そればかりはわたしではどうしようも無いことだ。さて、ミレイユからの手紙は読ませてもらった。御前達が何者なのか。どこから来たのか。どの属性やどんな魔術が使えるかも書かれておったわ。

そして今わたしのユニコーンはあなたたちを見て平伏した。あなた方は本当に神獣なんですの？」
これはフィンとリンドに対するものだ
「いかにも。妾は第1位の精霊である不死鳥じゃ。今は名をフィンという」
「同じく。俺は第2位の精霊、竜王だ。名をリンドという」
「な・・・・・・に」
隣に立つギルドマスターは驚きの声を上げる。
「ふむ。さっきはギルドで一悶着起こしたようね。名は何という」
「僕はメアリエルと言います。フィンの契約者です」
「わたしはエンフィシア。リンドの契約者です」
「わたしとしては君たちの魔術は非常に貴重だ。王宮に召し上げたいほどにな。だが君たちにもやるべきことがある。だからギルドに登録させた方がよいと思うのも確か。そこで、彼らをギルドに登録させたいのだけど・・・マスター、ガラム」
「ハッ」
「この者達はミレイユ殿の推薦通りの実力を持っておる。実力だけならばAランクもしのいでおるじゃろう。それに宝具ももっておると聞く。だからあなたたちには1つ手柄を立ててもらいたい。ランクアップに皆が納得するような、な」
「具体的にはどうすれば」
「うむ。ファーレインの北方部に帰らずの谷という最近湧いたダンジョンがある。ここの主を倒し、谷を浄化してほしいのじゃ。今あそこは魔獣があふれかえり、とても通れるところでは無いのだ。そのおかげで北方のオーグドン帝国との交易は迂回せねばならん。そこでここを解放してもらいたいわけじゃ。ダンジョンの解放はランクを問わずSランクまで上がる。むしろ、Sランクでも難しいくらいじゃからの。あの『黄昏』も今は別の方に回しておるのでな」
「分かりました。しかしどうやって僕たちがしたことを見分けるのです？」

「ギルドに登録すれば、ギルドカードが与えられる。これはランクを分けるだけで無く、どんなモンスターを倒したのか、どこのダンジョンに生き、どのように脱出したのかも分かる。だから、ギルドカードを見せてもらうのじゃよ。討伐以来なんかもこれで確認する。また、このほかに素材をはぎ取れば、ギルドが買い取るぞ」
「分かりました、女王様。そのダンジョン浄化してご覧に入れましょう」
「楽しみにしているぞ。ガラム、早速登録せい」
「ハッ　ほら、行くぞ坊主ども」
そうして、一行は一度ギルドへと帰り、奥の部屋で説明を受けながら登録手続きをする
「基本的には名前以外は書かなくても良いぞ。名前も偽名でかまわんしな」
「え～と　メアリエル、職業・・・旅人で良いか。僕はできたぞ」
「妾も」
「わたしも」
「俺も」
「じゃあ、簡単な説明に入らせてもらうぜ。冒険者はそのランクによってF～Aまでに分けられ、Sランクは何か功績を残した場合に与えられるな。Sランクになればそのときに称号ももらう。ランクは基本的には依頼をこなしたり、魔獣を討伐して、ポイントをためてランクアップするものだ。ただし何か特に大きな功績を成し遂げた場合はSランクへと飛び級する。コイツが簡単な説明は終わりだ。冒険者になるんなら、今書いた紙に血を垂らせ」
４人は適当に自分の指に切れ込みを入れ紙へと血を垂らす。とたんに紙は形を変え、白いカードへと変化する。
「白か・・・それは明度によって魔力を表す。白ってことは御前達は測定不能だな。こんなことは一度も無いんだが。まあいい。それは本人が触ったときにしか情報は表示されない。だから、身分証明にもなるし偽装も無い。これで説明は以上だ。帰らずの谷にいくん

なら、明日にしな。今日はもうくらい。ギルドの宿をつかえ」
「それじゃあ、お言葉に甘えるとする」
その日はギルドの宿屋で休み、1日の疲れをとった。ミレイユの家ほどでは無かったがなかなか心地よかった

第8話　別れ　ギルド　帰らずの谷（後書き）

8／17　ラーン王国からオーグドン帝国へ変更

～幕間～　2人の夜

――――――　～幕間～　2人の夜　――――――

その日の夜、天は炎奈にこんなことを聞いた

「炎奈、おまえは怖くなかったか？　俺の殺気」

「怖くなかった・・・て言えば嘘になるよ。だけど、安心はしてた」

「怖いのに、安心してるって、絶対変だよ」

「元々だもん。確かに天は怖かったけど、思ったほどじゃなかったし。天を信じてるし。それに天なら信じられるよ」

「僕なら・・・か。思えば炎奈と僕は悩みはにてるけど、原因は正反対だよね。僕は人を信じられないだから周りには理解されようとは思わなかったし、僕自身理解しようとしなかった。だけど君はその能力故に周りを理解しすぎる。だから言い出せなくてつらかったし、周りは心の中と口で言ってることが違う。だから君は信じることができなかった。正確には信じる必要が無かった？　だって信じてても信じなくても相手の考えてることは分かるんだから関係ないもん。そして、そのうちそれは理不尽な大人の考えを理解できる歳になって、周りには嘘をつく人が多い、いや、みんな嘘をつく。だから君は次第に人を信じられなくなった。そのときにはむやみに能力も使ってなかったんだろうけど。故にもっと信じられなかった。違うかい？」

「・・・そう。その通り・・・ね」

「これで僕のこと嫌いになった？」

「な！　なんで！？」

「僕たちはお互いに詮索しない、過干渉はしない。だけど僕には人の気持ちはよくわからないから過干渉することもある。まあ、少なからず人間の多くがすることだ。僕を嫌いにはならないの？　僕は確かに悩みを共有するけど、人としては最低だよ。人を殺した数はもう覚えてない。最初に殺したのはたぶん5歳の時かな。自分の父

親を殺した。組織にいた奴はみんなそうだよ。遅かれ早かれ親を殺す。俺は1人しかいなかったから手間が省けたけど。・・・ほら、こんな考えをする。人として最低だ。なんで君は僕のことを嫌いになったり怖がったりしないんだい？もしかして感覚が麻痺してるのかい？　こんな僕を見ても君は僕についてこれる？」
「・・・・・・ついてこれる？　馬鹿ね。決まってるじゃ無い。そんなの。わたしは天のことを嫌いにもならないし、怖がったりもしないわ！」
「・・・・・・困ったな。人生の荷物はなるべく軽く、が僕のモットーの1つなのに。思わぬところで荷物が増えちゃったみたいだ」
「・・・馬鹿」
「なんで泣くんだい？　本当に人間の感情て分かりにくいよ。どんなメカニズムなのか分からない」
「天・・・・・・天は生涯の伴侶がわたしじゃ不満？」
「最近の女の子は行動的なんだね」
「質問に答えて」
「その顔は反則だよ・・・・・・僕が断れるわけ無いじゃ無いか。そんなかわいらしいいじめたくなる顔をしてるなんて。欲しくなっちゃうじゃない」
「天・・・！」
「炎奈・・・！」
「ん・・・・・・・」
深い、深いディープキス。永遠にも感じられる時間が圧縮された短い幸福。
「・・・はぁ。ね、炎奈？　いいよね。僕だって男の子なんだから、こんなことされたら我慢できないよ。この前は邪魔がはいちゃったけど」
「いいわよ。きて、天」
「やれやれ、相手はとんだ変態さんだ。自分から誘うなんて。そう言うところも好きだよ、炎奈」

「わたしもそういうドＳな面も好きよ、天」
こうして夜も更けていく。２人の行動は全てフィンとリンドに筒抜けだったのだが、それを知り、顔を羞恥に染めることがあるが、それはまた別の話だ。

第9話　帰らずの谷　緑の少女

――――――第9話　帰らずの谷　緑の少女　――――――

翌朝、天と炎奈がフィンにからかわれ羞恥に顔を染めるということ以外は、何も無く過ぎ、ギルドへと向かう。

昨日のこともあったためか、入った瞬間あからさまににらまれたりすることは無く、すんなりとカウンターまで移動した

「パーティ登録したいんだけど」

「はい、それではギルドカードを確認いたしますので、提示願います」

4人ともギルドカードを受付に見せる。白銀にも近いギルドカードを見て、周りから、おぉ、と言う感性にもにた声が聞こえる

「はい、メアリエル様、エンフィシア様、フィン様、リンド様でございますね。リーダーとパーティ名をお決めください」

「リーダーは僕。パーティ名は『幻想』」

「はい、確かに登録いたしました。パーティランクはメンバー全員のランクの平均とさせていただいております。またダンジョン浄化時はリーダーのみSランク、他メンバー様はAランクとなります。ただし、Sランクの方が1人でもパーティに残っていれば、パーティランクはSランクとなります。パーティへの依頼は個人で行う物より2つほどランクが難しいとお考えください。これで、簡単な説明を終わります。ギルドカードで、パーティ『幻想』になってるかご確認ください」

受付に言われ、ギルドカードを見る。確かにそこにはパーティ『幻想』の名が刻まれているのだった。

「それでは、ご武運を。あなた方に旅の神ミールの祝福がございますように」

天達は外へと出る。そのまま門をくぐり、街の外の森の奥へ

「さて、帰らずの谷へ、か。だいたいの場所は分かるけど誰も行っ

たこと無いから『転位』は無理だな」
「主様よ。こう言うときこそ妾らの出番ですじゃ」
「俺も同意見だな。エンフィシア」
「そうだな『不可視』『誤認知』」
素早く周りから見えなくなる魔術と、探知系に引っかからなくなる魔術を展開する。
「リンドよ。競争じゃ」
「望むところ」
「おいおい」
2体の神獣はその姿を神々しい不死の鳥と、猛々しい漆黒の竜へと姿を変える。しかし、その大きさは全長2メートルほどに収まっている。
「主様、乗るんじゃ」
「ああ。では先に行ってるぞ、炎奈」
天はフィンの背中へと飛び乗り、フィンは乗ったことを確認するとその大きさを本来のものへとかえ、空高く飛翔する。雲を突き抜け、空には青空と太陽だけが輝いている。
「この高さまで上がれるのは神獣と言えど、妾だけなのですぞ、主様」
「そいつは凄いな。さすがは第1位か。しかし、不思議だな。本来この高さまで上がれば、外気温はマイナス何度とかだろ？」
「それは、妾の結界で防いでおりますじゃ。もっとも飛ぶのと同じで無意識魔法じゃから、妾も知らんがの」
「へぇ。便利だな。で、さっきからかなりの速さで飛んでるけど、今どれくらい？」
「そろそろ着きますじゃ。急降下するから、しっかり捕まっていてくりゃれ？」
「て、お、うぉわぁあああ」
フィンはほぼ垂直に地面へと降下し始める。本来ならすさまじいGがかかるはずだが、結界のおかげで、風圧もないし、Gもない。天

は落とされぬよう必死に捕まり、地面へ急降下するスリルのあまり、声も出ない。
「着きましたじゃ。主様も情けないのう」
「・・・死ぬかと思った・・・今まで乗ったどんな絶叫マシンより怖かったな」
フィンが上空２０００メートルほどまで降下し、水平飛行へと戻る。目の前には雲まで達するほどの巨大な岩壁。しかし、その中央部分は大きく裂け、谷を作っている。
自然の雄大さと同時に、恐ろしさを感じる、入れば戻れない死の谷だ。
「これが、帰らずの谷か」
「あいつらもようやく来たようですじゃ」
後方には巨大なリンドの姿がある。だが、それは視力１０を持ってしてようやく黒いつぶのようなものが見えた、と言うだけでまだ、遙か後方なことには間違いない。
フィンは速度を落とし、飛行を続ける。後方からリンド達が追いついたところで、リンドの速さに合わせ、並走する。
「これが、帰らずの谷・・・」
「そうらしい。地形的には前からあり、北との交易の要所だったようだが、最近ダンジョンが湧いたらしいな」
リンドが説明を入れる。そう、ダンジョンとは、湧くのである。突然出現するのだ。世にはびこる魔獣とは、魔界とこの世界の間に穴が開き、そこから瘴気が漏れ発生する。だが、ダンジョンとは魔界側から故意に開けられた穴によって生まれるもので、たいてい最奥部には穴を維持するための装置と、それを守る守護者、つまりはボスがいる。装置を破壊することによって正気は自然に薄れ、数日でダンジョンは消滅するが、魔獣達は残ったままだ。なので、ダンジョン浄化後はたいてい冒険者達による掃除が行われる。また、時折、魔界側から穴を開けた張本人が現れ、魔獣を指揮して進軍することがあるらしい。これらは侵攻と呼ばれ、１０年から１００年に１回

の頻度で確認されている。と、リンドの説明は続いた
「・・・着いたぞ」
谷は岩壁の間が優に1キロは離れておりみたこともない植物で覆われている。そして、そこから、まがまがしい魔力のようなものを放出しているのを感じられる。これが瘴気らしい。
「進むしか無いな」
4人はフィンとリンドが前衛。天が索敵。炎奈が後衛、と分担し、ダンジョンを進む。複雑に絡まった木の幹のようなもので複雑な迷路になっており、火炎で焼こうとしてもすぐにふさがってしまった。時に周りの植物が襲いかかり、さらには巨大な熊やオオカミ、山羊のような魔獣に襲われる。
「・・・面倒だ。全部焼き払えば再生の間に転位できるんじゃ無いか？」
天は面倒で不満を出しまくりだ。本人はさっきから2丁の愛銃（ミスリルスタッフから金術を使って生成したもの）で撃ちまくっている。グレネードのような物を撃っており着弾と同時に爆散している。ただその連射速度はハンドガンと変わらない。
「そんなことしたら、周りに迷惑かかり過ぎよ。おまけに目立つし。十分目立つけど、あんま目立ちたくない」
炎奈は文句を言う
「主様よ、確かに面倒なのは認めるが妾は、炎奈の意見に賛成じゃ」
「・・・疲れる」
フィンも反対のようだ。リンドは疲れるらしい
「まあ、それもそうだよな。それでもだいぶ進んだはずだが」
本来ダンジョンとは通路を探り、正解の道を進むものだ。この木の幹の壁も相当な温度が速度で無ければ傷一つ着かないかなりのものである。傷をつけるのにも一流の宮廷魔術師が必要だろう。しかし今天達魔術の強さを確かめるため時空術と心術以外の属性を試した結果、火術で作った槍が一番効率が良いのでそれを複数生成、射出して大穴を開け、直進している。

その槍はもはや火では無くプラズマと化しており、壁を難なく貫通する。しかし壁は一瞬燃え上がるとすぐに周囲から木の幹が伸び、火を沈下させその壁を防ぐ。そこで氷術で再生を阻害し、氷が破られるまでの時間を稼いで、穴をくぐる。この間約3秒。こんなことができるのは彼らだけだろう。彼らはすでに3時間ほどかなり高速に進みそろそろ装置があるところに出てもおかしくは無い。

「あ、あれじゃ無い？」

穴をくぐると横には今までの壁とは違う扉のような壁。手を触れると扉は木の幹を左右の壁へと同化させ、開かれる。中にいたのは、エメラルド色の髪をしており、前髪によって2つの瞳のうち1つが隠され、まるで三国時代の中国の文官のような服を着ている・・・少女だ。

「ほう、余のところまで来るとはな。・・・そうか。おまえがミールに導かれし者か」

少女の口から出た言葉は、その外見に反し、どこか威厳と畏怖を感じさせるものであった。

第１０話　魔を作りし者

――――――第１０話　魔を作りし者　――――――

「ほう、余のところまで来るとはな。・・・そうか。おまえがミールに導かれし者か」

「おまえが・・・守護者なのか？」

「あのような下等な種族と同じにするな、小僧。さて御前達の実力試させてもらうぞ」

地面から木が無数に生え、襲いかかる。炎奈がそれらを焼き尽くし、フィンとリンドが少女へと走る。そして、天は少女へと銃を向け連射速度を最大にし、撃つ。

「無駄なことだ」

無数の銃弾は少女の前で消滅し、体には届かない。その間にも無数に木は生え、次々に襲いかかっている

「ここならば魔力は外にもれんし、周りからはどんな魔術でも隠せるぞ？　安心してその宝具や神話級魔術を使ってくるが良い」

少女はフィンとリンドの２人をその場から１歩も動かずに木々によって防いでいる

「ならお言葉に甘えて。フィン、もどれ。リンド、少し耐えててくれ」

「うむ、主様よ」

フィンは前衛から下がり、こちらに戻って、迫り来る木々を次々に蒸発させる。

「炎奈、あれを倒すには一撃でやるしか無い」

「・・・分かったわよ。フェイルノート」

炎奈は宝具を取り出す。矢に自らの魔力をこめ、持てる限り最強の魔術を詠唱する。天はその間にブリューナクをあのライフルの形へと変える。

そして天もまた、銃弾にするための魔術を詠唱する。

「『絶望の火、災禍の渦、虚無の真空、狂う地、永久凍土、消失の万雷、束縛の金、抗うことを許されない恐怖、消え去る時空、汝、汝の選択により滅びの道を歩まん、我は死を与える物なり、神をも喰らいし槍、その身をもって受けよ。願わくば汝、痛み無き消失を迎えんことを』」
「『大いなる空、重力の壁、夜の帳、落ちし月、破滅、死を呼ぶ者、不吉の象徴、いまここで我が矢とならん。狙いははずれず、死を持ってして止まらず、完全に滅せよ。神を6つ打ち落とし弓、その力を持って顕現し、我が敵を滅ぼさん』」
莫大な魔力が収束し、大地は震え、空が唸り、周りの木々すらも大気中の魔力を満たすために魔力へと変換される。
「リンド、下がって」
「ああ」
フィンの合図でリンドも前衛から離脱する
「ほう、すばらしいな。ミールに導かれただけのことはあるというものだ。さあ、放ってみよ。せめて余の結界くらいは貫通してもらいたいものだな」
少女は何でも無いかのように平然とそこに立っている
天は引き金を引き、同時に炎奈が矢を放つ。その銃弾は有りと有らゆる天地災害を引き起こし、少女の眉間を矢ととも着弾し、貫くと同時に空間を消滅させる。
その矢は巨大な月となり、圧倒的な質量と、超重力により、地形を変え全てをなぎ倒し、その超質量で少女を押し潰し、銃弾によって空間ごと消滅する。
あとには何も無い虚無が残り、徐々に空間の穴はふさがっていく。
そこには空気中の魔力より世界の法則によって変換された空気だけがあるはずだった。そう、だった。
しかしそこには無傷の少女が立っている。
「ふむ、結界は破ったようだな。だがミールに導かれたとはいえ、所詮アーラの子か。では、最後だな」

天はその直感により瞬間的に能力を発動させ、少女の指先から放たれる光を予見しつつ、極限まで伸ばされた体感時間の中、回避のために体を動かす。
だが、少女は引き延ばされた体感時間の中、平然とした速度でこう言った。
「・・・・・・貴様、もしや気付いてはおらんのか？　自らが時間の速度を変えていると言うことを。それは『事象を操やつる（イベント・インストラクト）』だぞ。何故貴様が使える」
「ど、どういうことだ？」
天は困惑している。今までこの力が働いているときに話しかけられれば、相手の行っていることは酷く遅く、何を言っているかよくわからないものだったからだ。
「ふむ。ミールに言われてきてみれば、なるほどそう言うことか。おもしろい。ひさしぶりに地上に降りることにしよう。何、貴様らに興味が湧いた。殺しはせぬ」
天は能力の発動を止める。翡翠の瞳は光を失い、黒い瞳へと変わった。
「なに？　今どうしたの？」
炎奈は混乱し、他の２人も何が起こったのかよく分かっていないようだ。
「ふん、説明は余が顕現してからしてやろう。ここにあるのはあくまでも投影体なのでな。最も来るときに瘴気が漏れ、ダンジョンができてしまったようだが。どれ」
その瞬間、すさまじい瘴気が漏れ、空間がゆがみ、余りの瘴気に苦痛に顔をゆがませ、立つこともままならなくなる。数分してそれらは収まり、先ほどまでのすさまじい瘴気も嘘のように消え去る。そこには先ほどと姿の変わらない１０歳ほどの少女の姿がある。だが、その威圧感、膨大な魔力、そしてそのまがまがしさは先ほどとは比べものにもならず、弱いものなら、そのまがまがしさに当てられ、その場に倒れ込んでしまうだろう。

「ふむ、ひさしぶりの地上だな。久しいな、不死鳥、竜王。４０００年ぶりだ」
フィンとリンドはその少女に平伏している。
「覚えていてくださり、恐悦至極の極みであります。しかし、イーリ様よ。もう少しその瘴気を押さえてくれねば、妾達でさえも苦しいのです」
フィンはいつになく、丁寧に、気を遣っているかのように答えた。
「ふむ。すまなかった。これでよいか。よければ頭を上げよ」
イーリと呼ばれた少女からあふれる瘴気が収まり、天達と変わらないほどになる。２人は顔を上げた。
「まだ余のことを言っていなかったな。余は世界創造の７柱が１人、魔を作りし者『イーリ』だ。そち達に興味が湧いたのでな、ご一緒させてもらおう。ミールの奴が何を考えておるかはしらんがな」
少女は不敵に笑い、天と炎奈は目の前に神がいると言うことに実感が湧かず、苦笑した。ダンジョンの瘴気は消え、ダンジョンは消滅した。パーティ『幻想』のギルドカードにダンジョン浄化の記録が着いた瞬間である。

第１１話　神の能力　茨の女王　多種族

――――第１１話　神の能力　茨の女王　多種族　――――

「さて、では、何故おまえが『イベント・インストラクト』であるかどうか、説明してもらおうか」

「ちょっとまて、　いべんといんすとらくと？　なんだそれは」

「ああ、そうであったな。それは神に与えられる権限の１つなのだ。事象を操作することができる力だ。だがな、時空間だけは別だ。時空間は事象であり、法則であるため、時空間の事象を操ることができるのはミールの奴しかおらん。なぜ、それが使えるのだ？　まあ、この権限については説明しておこう。権限は『事象を操る（イベント・インストラクト）』の他に『イベント・クリエイト（事象を起こす）』『事象を崩壊させる（イベント・フォール）』がその上位にあり、『法則を操る（ルール・インストラクト）』『法則を作る（ルール・クリエイト）』がさらに上位にある。

ただし、全てが全て使えるというわけでは無い。半神である『ツァーリの残した厄災（カース・オブ・ツァーリ）』のミレイユとか言う小娘はイベントインストラクトをつかえるが時空間には干渉できない。余は『魔』を作ったときにルールクリエイトは失ったが他の５つは今でもある。しかし、ルールインストラクトで干渉できるのは、自らが作った法則のみ。まあ、おまえのように時間を遅める程度ならばできるだろうがな、時空間というのは特殊でな、時間の速度を速めたり、遅めたりするのはイベントインストラクトでもできる。ただし、時間を止めたり、あるいは逆行させるためには、ミールの持つルールインストラクトが必要だし、そうした場合、ミール以外の全ての時間が戻る。むろん世も例外では無い。綺麗さっぱり忘れてしまうだろう。だがな、これはあくまでも神の力なのだ。何故いくらミールの加護を受けているとはいえ、アーラの子如きが使える」

「それは・・・気付いたら使えていた、としかいえません。それに僕は未来を予見する力もあるんですが、これはどうなんですか？」
「おそらくはイベントインストラクトの影響だろう。あれは、世界から情報を受け取り、それを改変するものだ。しかし、もしおまえが未来の情報を得ているのならば、使い方次第で、それを自在に変えることができるかもしれんな。いや、おまえには時空間に干渉することしかできないようだから、無理か」
「あと、こちらに来るとき、ミールからまだこの力は強くなる、と」
「おまえは、第2のミールになるつもりなのか・・・？」
「人間が神になれるのですか？」
「・・・時間軸から抜け、永遠の時をさまよい、時空間を自在に操り、渡り歩く。気に入らない結末なら、何度も戻って繰り返す。それを神を言わずしてなんと呼ぶのだ？　おまえ、いや横の小娘も我々神と遜色無いほどの魔力を持っている。どうせ、その小娘も何か力があるのだろう？」
イーリは天の隣に立つ炎奈へと視線を向け、そしてまた天へと視線を戻す。
「どうなんじゃ？」
「ええ。彼女には・・・」
「いいわ。私が言う。そう、あなたの考えてるとおり。わたしのもある。人に限らず、生物に限らず、あらゆるものに込められている感情や記憶を読む力よ」
「ほう、おそらくは物体に乗せられた情報の受信じゃな。小僧のに比べれば、見劣りするが、それはおそらくは小僧の予見のような、イベントインストラクトの影響じゃろうな。まだ、何ともいえんではあるが」
「ああ、そうだ1つ言っておくぞ。僕の名前はメアリエル・・・いや、天で良いか。だが、他に人がいるときはメアリエルと呼んでくれ」
「わたしは、炎奈よ。エンフィシアと他にいるときは呼んで」

「了解じゃ。ではそろそろいこうかの。ファーレインの首都じゃろう？」
「ああ。だけど人目につかないところに転位してくれよ？」
「分かっておる。そこの２人の精霊、お前らも特別に余に敬語を使わないことを許す。余は、これより、御前達と仲間として接していくから、お前らもそのように接せよ」
「・・・・・・分かったわ」
「・・・・・・了解した」
「それを、早く治せというのじゃ、リンド。まあ、よい。余は今機嫌がよいのでな。『転位』」
ミルアージュへと転位する。少し裏道で、周りに人はいない
「よし、いいな。じゃあ、俺たちはこれからギルドに行って報告しないと。イーリはどうするんだ？　そういえば偽名は？」
「別に神の名前であるくらいで怪しがられることも無いだろう。父親が神話ずきだったとでも言えばな。植物の魔法は人前では自重せねばならんの。ギルド登録は大昔の設立当時にしておったが、まあ、大丈夫かの。見た目とも重なる半精霊族で登録しておったし、精々３０００年前じゃ。ギルドマスターなら余のことも知っておろう。マスターにも余のことを代々伝えよと言っておったからな。また遊びに来たときのために。一応伝説のＳランクとか呼ばれておるが、まあ問題ないじゃろう。余が冒険者であったときは、茨の女王、死の女王、大魔術士、そして何より称号は不死にいたりし者じゃからな。実際にこれらの魔術を開発したんじゃよ。余は全ての属性が使えておったからな」
「と、いうと、ミレイユさんが言ってた時空術・心術の使い手の１人ってことですね」
「そうじゃの。もう１人はお主らと同じような奴じゃし。最後の１人は知らんの。まあ、時空術が使えたのだから、時間を止めておったとか言えば問題ない。というわけで、いくぞ。ほんの３０００年で随分と変わったものじゃ」

あっけらかんととんでもないことを言う少女である。一行はそのままギルドへと向かう。ギルドは昼過ぎで人も集まっており前回にもまして、様々な種族がいる。様々な種族がいるが、この世界でおおい種族はまず獣族と人族に分けられる。獣族とは、妖獣や神獣のことだ。妖獣は魔力を持ち、人とは関わらないよう山奥などで暮らしている。時折人に協力し、村で守護神などとあがめられることもあるようだ。比較的人とは敵対しない。神獣は、妖獣でありながら精霊と同じ役割を果たしているもので、精霊と妖獣の頂点に立つ種族である。強力な魔力を持ち、高位の神獣は人語を解するだけで無く、自在に操り、また自らの力だけで地上に顕現できる。高位の神獣に人族が逆らった日には、1日で世界が滅びるだろう。

次に人族だが、『人間（ヒューマン）』『獣人（ワー・アニマル）』『半獣人（パラ・アニマル）』『半精霊（デミ・グリモワ）』『鬼人（オーガ）』と言う5つの主な種族がいる。ただし、このほかにも様々な種族がおり、中には集落から出てこない種族もいるため、全容の把握は難しい。ヒューマンはそのまま、人間である。技術力に優れ、身体の欠点を技術に補い、他種族に対抗している。人間の国『オーグドン』は代々人間が王をつとめ、人間以外は著しく差別される。次にワー・アニマルは身体能力、特にスピードに優れ、またプライドが高い、戦士の種族だ。しかし、魔力を持つことができず、魔術を使えない。彼らはケモノから、独自の進化によって、人型になった者達である。また、人との間に生まれたパラ・アニマルを嫌悪しており、パラ・アニマルに対する風当たりが強い。獣人の国『メルゲン』は現在鎖国しており、獣人であっても、一度外に出れば、二度と入ることはかなわない。唯一ギルドの権力が届かない国だ。次のパラ・アニマルは人間と獣人の間に生まれる混血児で、人間の体にどこか一部ケモノの特徴が表れる。また、ごくまれに魔力を持つ物も生まれる。彼らは社会的地位が低く、貴族などに愛玩用で奴隷として高く売れる。彼らがまともに生活できるのは、中立の国ファーレインだけだ。次のデミ・グリモワは太古の昔に、人と神獣が交わったことにより生まれた種族で、遙かに高い魔力を持つ。また、１０歳程度で肉体

の成長が止まり、その後は６００年以上を不老の体で過ごす。老衰で死ぬときは、ある日突然周りから見れば何の予兆も無いのに、体が光の粒子に変わり、世界に溶けるように亡くなる。本人達はおおよそ３日前に死期が来たことを悟るそうだ。彼らは非常に友好的だが自らの目的のためならどんな犠牲もいとわないと言うときとして残酷な面もある。彼らの国『マルンガルン』は魔術国家として成り立っており、国立魔導学院は、魔術師の育成だけで亡く様々な魔道具の開発者や、宝具の解析のための研究者を育てる一流の機関で魔術の水準は世界一である。最後にオーガは身長３メートルほどで、額からは３０センチほどの角を生やしている。身体能力、特にパワーに優れ、彼らの一撃は岩をも砕くほどだ。また、鍛治屋としても優秀で、様々な名剣を作り出している。オーガ達は周りの島々や、山などにひっそりと住んでおり、鍛治屋や冒険者がおおい。また、魔道具製造などでよく取引するため、デミ・グリモワと仲がよく、ファーレインを除けばマルンガルンにおおい。

と、まあこんな感じだ。天たちは、受付に行くと、わずか５時間程度で帰ってきたことに驚いた顔をされたが、ギルドマスターの部屋へと通される

「まさか、こんなに早く片付けちまうとはな。ん？　そっちの嬢ちゃんは誰だい」

ギルドマスターのガラムはもはや驚きを通り越して、あきれているようで、もはやどうとでもなれ、と言う顔をしている。

「余は、こういうものだ」

虚空から、ギルドカードが現れる。白銀のギルドカードだった。

「どれどれ・・・・・おまえ、いや、あなた様があの『不死にいたりし者』にして神であらせられるお方ですか？」

「その通りじゃ。マスタードどもは余の言いつけを守っておるようじゃの。余は、この者達とともに行くが、余が生きていたことは公表せよ。そうじゃな、この者達の祝いの席でよかろう。時間を止めておったとか言うから、そち達には問題ないことじゃ」

「は、ははぁ」
急に態度を豹変させたガラムを見て、天達は一体どんなことを伝えぎけばこうなるんだろう、と密かに考えた。そして、絶対に怒らせてはいけない、と思ったのであった。
「まあ、ともかく。王城へは明日行く。御前達の祝いが一週間くらいであるから、それまではのんびりしていて良いぞ。今日も、まあギルドの宿で泊まれ」
「そうじゃ、余はこの者達とパーティを組むのだが」
「なら、この水晶玉に手を触れてください」
何故か、敬語のガラム。それを見て周りは苦笑する。
イーリが手を触れるとギルドカードが輝きだす
「それじゃあ、御前達の中から、誰でも良いから、水晶玉に触れろ」
「じゃあ、僕が」
天が水晶玉に触れる。ギルドカードは輝き、やがて収まる。
ギルドカードのパーティメンバーにはイーリの名前が新たに刻まれていた。
「じゃあ、あとはごゆっくり」
天達は、宿屋へと行き、部屋を取って休んだ。何事も無く夜の帳はおり、一日の終わりを告げたのであった。

第１１話　神の能力　茨の女王　多種族（後書き）

種族の説明が長くなってしまった・・・

第12話　Sランク　無知宰相

――――――第12話　Sランク　無知宰相　――――――

翌日、ギルドを訪れた5人はガラムのあとについて、王宮へと通される。

謁見の間には、前回と同じく、この国の要人と思われる人物達が並んでいる。女王の隣に立つユニコーンはやはり、平伏した

「陛下、昨日の報告の通り、帰らずの谷のダンジョンは浄化されました。また、彼らが浄化者です」

「まさか、1日でやるとはな。では規則に則り、パーティ『幻想』のリーダー、メアリエルはSランクへと昇格、また、他の3人はAランクへと昇格させます。ところで、そちらの少女は？」

「余は昨日からこの者達とともにいるものだ。だが、小娘よ。名を尋ねるときは、まず自ら名乗るのが礼儀であることは教わらなかったのか」

「貴様！　陛下になんたる口の利き方を。不敬罪だぞ！」

宰相らしき人物から、怒りの声が聞こえる。

「それは失礼した。わたしはファーレイン王国第14代女王アルマ・ミランドル・ファーレインという。『氷の女王』と呼ばれておるな」

「陛下！」

「ふん。余は『イーリ』『不死にいたりし者』である。粗相の無いようにせよ」

周りからはざわめきの声が上がるが、宰相だけは聞いていなかったようだ。

「き、さ、ま！　さっきからなんたる無礼だ！　衛兵、このものを引っ捕らえよ！」

「おう、おう、怖いのう。まあ、仮にもSランクである余を捕らえられるとは、思わんがの。よいのか？宰相。貴様のおかげでこの国は滅んでしまうかもしれぬぞ？　余ならこの国1つどころかこの大

陸を沈めても余るほどの力を持っておるのじゃからな」
「そろそろ、お遊びはやめておけ。イーリ」
「宰相、この方々は仮にもお客様。ましてや『不死にいたりし者』といえばあの伝説のSランクですよ。まさかまだ生きているとは思いませんでしたが」
メアリエルと女王の2人は制止を呼びかける。
「ふむ、すまんかったのぅ。つい反応が面白かったからやってしまったわい」
「しかし、陛下！」
「やめなさい、といっているのです。本当にあなたはこの国を滅ぼすつもりなのですか？　わたしの部下が失礼しました。しかし彼は無知ではありますが愚か者ではありません。どうか彼の無知をお許しください」
「では仕方ないの。余は寛大だから許してやろう」
「ありがとうございます。さて、メアリエルよ。お主には称号を与えねばならん。それらの思案の時間も必要であるし、ダンジョンが浄化されたとなれば、国を挙げて祝うのが習わしだ。それまですまないが、城に滞在していてくれないか？　不自由はさせない」
「ええ、分かりました。監視の意味も含めて、ですね」
「おい、貴様！　本当に帰らずの谷を浄化したのか？　何故わずか1日足らずでできるのだ。あそこまでは少なくともかたみち3日はかかるはずであろう」
宰相は訝しむように意見する。
「そうですね。1つ言っておきます。僕たちは国に仕える気は無い。強制される気も無い。だから、ここで僕たちの実力を見せておいてあげます。僕たちの機嫌を損なえば、あとは無いと思ってくださいね。フィン」
「いいのか、主様よ？」
「どうせ、いずれ知れるだろう。ならさっさとやっておいた方が良い。すみませんが、陛下。庭の方へ移動してもかまいませんか？

他国への牽制にもなるでしょう」
「・・・・・・分かったわ。宰相、あなたはとんでもないものと今口論しているのよ。これから実力の差というものを知ることになる。彼、いや彼らを止めることは決してできないとね。庭へ移動なさい。それから、城のもの全員を集めなさい。くれぐれも彼らに粗相の無いように」
そう言って、全員庭へと移動する。訓練していた騎士達が、訓練を中断し、また城にいた侍女や騎士達が集まる。
「これでいいでしょう。宰相。あなたはよく見ておきなさい」
「じゃあ、フィン。よろしく」
「リンド、殺しちゃだめよ」
フィンとリンドの体は光の粒子へと代わり、やがて巨体を形成する。現れたのは神々しい炎を身にまとう鳥と、漆黒の竜。
「ば、馬鹿な・・・」
リンドが顔を近づけ、その大きな口を開けると、宰相は腰を抜かし、気絶してしまった。周りからはざわめきの声が夏場のセミのように聞こえている。
「妾は第1位の精霊、不死鳥である。妾はメアリエルに契約するもの。主様に楯突くものを許しはせぬぞ」
「俺は、第2位の精霊、竜王だ。エンフィシアに楯突こうものなら、この俺が食ってやるよ」
「話に聞くのと、実際に見るのでは大違いだな。なるほど、わたしのユニコーンが平伏するわけです。皆の者、分かったな！　この方々は大いなる神獣と契約を結んだ者達だ。くれぐれも粗相の無いようにせよ」
「フィン、もう戻って良いぞ」
「リンドもよ」
2人の言葉に、2頭の神獣はうなずき、その体を人間のそれへと変化させる。
「部屋へ案内させます。アンナ、彼らを客室へご案内なさい」

「は、はいっ！」
近くにいた侍女らしき女性がこちらへと歩いてくる。
「え、と。侍女のアンナです。よ、よろしくお願いします」
「うむ、よきに計らえ」
「何もそんなに緊張しなくても・・・」
「そうそう、緊張しなくて良いのよ」
「そ、そんなわけには」
「妾達も随分と怖がられたものじゃのう。本当に怖いのはあちらだというのに」
そういってフィンはちらりとイーリの方を見る。
「と、とにかくお部屋へとご案内します」
アンナはそのまま歩き出し、５人はそれについて行く。通された客室はミレイユのところと遜色無いほどの部屋だった。
「昼食の時にまた、お呼びいたします。不自由があれば、侍女にお申し付けください」
アンナはそう言って、逃げるように立ち去った。
「まったく、大変だの。地上は」
そうは言いつつも、アンナの戸惑う顔を見ていて、顔には満面の笑みを浮かべているイーリであった。

第１３話　式典　決闘

――――――第１３話　式典　決闘　――――――

５日後、式典当日。ダンジョンの浄化に伴い、北方のオーグドンとの交易路の復活もあり、城下は活気にあふれている。

もうけようとした商人も多く集まり、珍しい品々が露天には並ぶ。

そして、中央の広場の演題の前には、人目英雄を見ようと様々な冒険者が人垣を作り、あふれんばかりだ。

演台の横には、ギルドマスターや国の武官がすわり、そしてあの『黄昏』もＶＩＰとして、招かれたようだ。

そして、今女王があらわれ、演台に立つ。歓声があがり、そして、ゆっくりと式典が始まる。

「諸君、今日は、我々の新たな英雄の誕生をともに祝うことができ、うれしく思う。わたしが長々とあいさつをするよりも、本人を見た方が良いだろう。メアリエル」

女王は天の名を呼ぶ。すると、演台の横から、１人の青年、天がゆっくりと壇上へと上がる

「彼が、ダンジョン『帰らずの谷』をわずか1日で浄化したパーティ『幻想』のリーダー、メアリエルだ。諸君、彼の無事を祝おうではないか！」

「「「「「「おぉ！」」」」」」

歓声が上がった。だが、中にはまだ子供では無いか、と訝しむようなめで見る物もいる。

「さて、メアリエルよ。この度ダンジョン『帰らずの谷』を浄化した褒美としてランクをＳへと引き上げ、ここに称号『グラン・ドレッド・インカ（偉大なる恐怖の具現者）』を与える」

この称号は、初日のギルドの事件と、本人との話し合いの結果に生まれたものである。

「ありがとうございます」

メアリエルのギルドカードは、黄金色に輝き、カードの裏面には大きな鎌を持つ少年の紋章が浮かび上がる。ギルドカードの裏の紋章、それは人によってそれぞれ違い、性質を表すとされるが、これこそSランクの証である。
「さて、ここにいる諸君の中には、まだ彼も年端もいかないため、実力の分からないものも多いと思う。そこで、パーティ『黄昏』がリーダー『グラン・オーダー・ランゲ』ことバルムンクより、1つの提案があった。それはバルムンクと、メアリエルが決闘を行うというものだ。さて、メアリエルよ。おまえはこの決闘を受けるか」
女王の口から飛び出た提案はメアリエルも全く聞いていないものだった。だが、実力を見せる良い機会でもある。そこでメアリエルはこの決闘を受けることにした。
「分かりました。謹んで、お受けします」
「それでは、闘技場へ。開始はこれより1時間後とする」
メアリエルは、壇上から降り炎奈達と合流する。
「さて、鬼が出るか、蛇が出るか」
「本人が鬼だから鬼しか出ないでしょ」
炎奈が冷静なツッコミを入れる。そう黄昏のリーダー、バルムンクは鬼人なのだ。3メートルはある巨体に自らよりも大きい2振りの大剣をつかう超パワーファイターである。
天達は闘技場へと移動する。観客席はすでに満席で、立ち見まで出ている。そして、闘技場の隅では、一流と思しき魔術師達が結界をはっている。
「エンフィシア達は上へ。関係者用の席があるはずだ。だけど、フィン」
天が炎奈へと指示を出す。
「うむ。主様」
フィンはその体を、粒子へと変え、天の体の中へと消える。
「そうね。それじゃあ、私たちは上に行くわ」
「余は、特別席で見るからの。その方がおまえさんも本気でやれる

じゃろう」
「・・・ああ、そう言うことか。分かった。じゃあ、俺は控え室に行くかね」
「がんばって」
「ああ」
「2人の世界を出すのはやめてくれんか・・・　まあ、よいわ。余は特別席に行ってくる」
そういってイーリは光りに包まれ消えた。
「じゃあ、僕ももう控え室に行くよ」
「うん」
天は控え室へ、炎奈とリンドは奥の階段を上がった。

イーリは結界を張っている魔術師のところへ転位した。
「！　何者だ」
魔術師の1人が気付き、声を掛ける。
「すまないな。余はこういうものじゃ。帰還の話は・・・宮廷勤めの者がおれば分かるが」
そういって、イーリは自らのギルドカードを見せる。と言っても裏面を、だ。そこには茨に巻かれた少女の紋章があり、彼女がSランクであることを証明している。
「・・・失礼しました。それで、こちらにはどのような用件で？」
魔術師は目の前の少女がSランクであることを確認し、ここに来た理由を問う。
「なに、お主らの貧弱な結界を補強してやろうと思ってな。『断絶結界』」
安全のために張られている結界の内側に、もう1枚、結界が張られる。
「『断絶結界』・・・それも陣魔術では無く、詠唱魔術。しかも詠

唱破棄ですか。Ｓランクはやはり格が違った、と言うわけですね」
断絶結界　外からも、内からも、術者の許可なしには通ることができない結界。それは限りなく空間分離に近い結界であり時空術を除けば最高の性能を持つ結界だ。
無属性に分類され、本来は陣魔術によって精密な魔力管理を行って発動、維持させるものである。詠唱魔術でやろうとすれば、とんでもなく魔力の扱いに長けるか、馬鹿みたいな魔力消費、そして明確なイメージが必要になる。おそらく、圧倒的な魔力を持つ半精霊族の一流魔術師でも発動して１０分もすれば魔力切れで倒れるだろう。
第一に発動できるかすらも疑問である。
おおよそ、普通の魔術師にできるものでは無い。
「ふむ、これでいいじゃろ。さて、おまえさん達。余はこの結界を張っておるのじゃ。この席にいてかまわんな」
魔術師達は絶句している。たかが近くで見たいが為に、こんな高度な結界を張ったのか、と。
「・・・・・・あ、ああ。こちらこそすまないな」
「うむ。だが、余がしたくてしたのだ。気にすることではない。それより、そろそろ始まるぞ」
闘技場に天とバルムンクが入る。２人は中央に向き合ってたち、合図を待つ。バルムンクは２振りの大剣、天はミスリルスタッフを持っている
「では、ルールを説明します。敗北条件は戦闘不能になるか、降伏することです。ただし、相手を死に至らしめた場合は逮捕しますので、ご注意ください」
審判席から、説明がはいる。
「お互いに仲良くな。メアリエルよ」
「あなたに言われても不安しかありませんね」
「それでは、はじめ！」
天が殺気を解放する。全てをあきらめた、光りの無い絶望を瞳に宿し、闘技場内の空気は一瞬で変わる。

「その歳でその殺気とは、恐れ入るぜ。まるで魔竜のような殺気だ。『グラン・ドレッド・インカ』とはよく言ったものだ」
余裕を見せるバルムンク。
「そんなに余裕で良いのか？　こっちから行くよ？」
バルムンクの視界から、天が消える。瞬時に反応し、後方へ大剣を振りかぶるが、天へと振りかぶった大剣は触れること無く昇華し、天のミスリルスタッフはバルムンクの顎へ強烈な一撃を突き出す。しかし、あと一歩というところで、バルムンクの持っていたもう1振りの大剣に防がれる。後方へと大きく退き、状況は振出しに戻る。
「さすがに、強いな」
「おまえこそなかなか強いじゃ無いか」
「すぐに、そんな余裕、消してあげます。それより、『宝具』使わなくて良いんですか？」
「おまえもな」
「ええ、僕は良いんですよ。『雷杖』」
ミスリルに魔術陣が浮かび上がり、雷を発する。発生する雷はミスリルスタッフを柄にした3メートルほどの大剣状に圧縮され、紫電の輝きを放つ。
「いきますよ」
大剣を両手で構え、瞬時に消える。
「ッ！　グラム」
バルムンクの叫びとともに、漆黒の大剣が、現れる。天の大剣は漆黒の大剣に触れた瞬間雷が消失し、空振りに終わった。
バルムンクがすかさず追撃に入る。大剣をそのまま振り切り、天の頭上から振り下ろす。だが、それは天には当たらず、地面から生える4本の鉄の触手によって受け止められる。
一瞬だけ、止まったが、瞬く間に、鉄は塵と化し、そのままふりおろす
間一髪のところで回避し、そのまま後方へと下がる。

「危なかったなあ。仕方ない。使うか。ブリューナク」
天の手に長大なライフルが握られる。天はそれを片手で持つと、ライフルではあり得ない速さで連射する。
「クッ」
攻守逆転。バルムンクはどうにか、その宝具で防いでいる。
「魔術の拡散・・・かな。やっかいだ。『真空』」
とたんに、バルムンクの大剣を持つ腕がふくれあがり、血しぶきを上げて破裂する。
天は、グラムを落とした隙を見逃さず、一瞬で間を詰め、形状変化したハンドガンを額に突きつける。
「その腕では戦えないでしょう。降参してください」
「・・・降参する」
天は殺気を消し、しばらくの沈黙のあと歓声がわき上がる。
「・・・・・・あ、勝者、メアリエル！」
天は即座にバルムンクの腕をつかみ、回復魔術をかける。
「『治癒』」
バルムンクの腕は嘘みたいに回復し、無傷へと変わる。
「凄い精度だな。一流にもこんなに使える奴はいないだろう」
「そうですか？」
話していると、横からイーリが歩いてくる。
「もう少し余を楽しませてくれると思ったんじゃがの。余が断絶結界を張った意味が無かったでは無いか。どうせなら、神話級魔術の1つや2つは使ってくれても良かったのだぞ」
「それしたら、死んじゃうじゃん」
「・・・は・・お前達何言ってるの？」
神話級魔術、通常は数百人単位の一流魔術師が巨大な魔術陣を使って発動するものだ。とても個人で使えるものではない。
「いや、だから。殺さないで倒すのって難しいですよね。て、ことです」
「・・・・・・コイツは期待の新人だぜ。俺たちもうかうかしてら

れないな」
「全部仕事は任せますよ」
こうして、メアリエル達『幻想』はSランクとなった。のちに伝説となるパーティの幕開けである。

第1話　青年は赤子に　老人の手で

――――――第1話　青年は赤子に　老人の手で　――――――

彼は赤ん坊だった。森の中に1人、大樹の根元で眠っていた。

「おまえさんが、『ヒムロ』じゃな」

彼を拾ったのは1人の老人だった。見た目は70歳くらいだろうか。きれいな白髪で、顎から生えているひげは地に着くか着かぬか、と言うあたりまで伸びている。

絵本や、物語に登場する魔法使い、と言うイメージがぴったりな格好をした、その老人は確かに赤ん坊の名前を呼んだ。

「あ、うぁ」

「まだ、言語機能が発達しておらんようじゃな。何年か待つことになるか。『ヒムロ』よ。帰るぞい『開門』」

空中に門が現れる。この赤ん坊は、目は見えていたらしく、初めて見るまか不思議な光景に、驚いているようだ。

門は開かれ、中には花畑とひっそりとした小屋が見える。老人は『ヒムロ』と呼んだ赤ん坊を抱え、門をくぐると、その門は閉じ、消滅した。

中の光景は、神秘的、と言う言葉のために作られたような空間だった。地平線の彼方まで花畑が続き、空には宝石箱をひっくり返したような星空、そして月光の青白い光に照らされている木造の小屋はまさに神秘。妖精が出てきても目を疑わないだろう。

小屋の中は、リビングとダイニングキッチン、それから寝室があるだけだ。

「『ヒムロ』ここがおまえの家だぞ」

老人の言葉は、赤ん坊の耳に優しく響いた。

赤ん坊は3歳になった。このときには赤ん坊は言葉を話せるまでになっていた。
「さて、ヒムロよ。おまえさんは、ミールに連れられてやってきた。そうじゃな？」
老人は優しげに問いかける
「・・・うん。じゃあ、ご老人、あなたは何というのですか」
「ああ、すまなんだな。儂はトシユキ。おまえさんとは違い、直接こっちに来たんじゃ。もう３０００年以上も前の話じゃな」
「・・・３０００年？」
「うむ。儂は向こうでも老いが来るのは遅かった。７０くらいで完全に止まったんじゃな。どうせなら、もう少し早く止まってもらいたかったんじゃが。そしてミールに連れられて、こちらに来た。今はあやつの手助けをしておるんじゃ。これで何回目になるんじゃろうな。まあ、よい。儂は今からおまえさんを鍛え上げる。１６まではこの世界の常識と、武術、そして魔術を教える」
「トシユキ、あなたがミールの言っていた、こちらに先にいた人か？　１６歳まで一緒にいろと言われた」
「儂がこちらに先に来ていたのはそうじゃ。補佐もしてもらうじゃろう。だが、魔王を倒してもらうのはおまえさんが１６歳よりあとになってからじゃ。儂の他にも来る奴はおってな。其奴らと一緒にしてもらう」
「・・・分かった。僕は１６歳になって、魔王を倒すために外に出る。あなたはそれまでに僕にいろいろなことを教えてくれる」

「その通りじゃ。もちろん、勉強もしてもらうぞい」
「・・・分かった」
幼子は渋々うなずいた。

幼子は5歳になった。2年間、この世界のことを学び、武術を学んだ。
「さて、今日からはいよいよ魔術についてじゃな。まずは詠唱魔術と、陣魔術についてじゃ。詠唱魔術は――――」
トシユキは次々に魔術について教え、それをヒムロは赤ん坊の記憶力を持って覚える。ヒムロは学習したことを次々に吸収していった。
「さて、精霊じゃが、おまえさんは召喚せんで良い。5歳になったのじゃ、儂がプレゼントをやろう。『人工精霊』じゃ。出てくるが良い」
空中に黒い霧のような物が現れる。やがてそれは変色し、血が乾いたような赤黒い毛色の巨大な狼の姿へと変わる。
「此奴がおまえさんの主じゃ」
「・・・」
狼は、ヒムロの指を少し噛み、その血を吸う。
「ヒムロ、これは人の心の中に入ることができ、さらにその姿を自由に変えられる。おまえさんが望む姿にも、敵が最も恐ろしい物にも姿を変えられるじゃろう。そしてひとたび心の中に入れば、殺す

手段は存在せぬし、様々な情報も手に入れることができる。もっとも此奴より強い精霊を従えておれば別じゃな。だが、おそらくは精霊位階第5位には入る強さじゃ。時空術と心術に適正をつけることはできんかったがの。名前を与えるのじゃ」
「・・・それじゃあ、おまえの名前は『トウテツ』魔を食う霊獣の名だ」
「・・・ああ」
「これで、おわりじゃな。ああ、そういえば、トウテツは一応『女』じゃからな」
「・・・それが？」
「なんじゃ、つまらんのう。夜の世話をさせてみたいとは思わんのか？　好きな姿にできるんじゃから、ねこみみでも、狐耳でも、幼女でも、何でもありじゃぞ？」
「な！　い、いや！　そんなことは！　と言うか、まだ5歳だから！」
「主がやりたいなら、かまわない。じゃあ、先に休むよ」
トウテツは、その手をヒムロに当てると、光の粒子となって、消えた。
「・・・これが、心の中に入る、と言う奴なのか？」
「うむ、それは契約した精霊なら誰にでもできることじゃ。だが、トウテツは、それを誰にでもできるのじゃよ。本来は契約者にしかできんのじゃがな。しかし、本当につまらんの。ああ、それと契約した精霊と、感情は共有されるから、欲求不満だと見抜かれるぞい？」
「余計なことは言わなくていい！」
「赤面した顔が面白い尾からの。まあ、それに免じてこのくらいにしておこう」
「・・・トシユキってこんな性格だっけ」
幼子の嘆きに答える物はいなかった

第2話　舞台を去った道化は裏で踊る

――――――第2話　舞台を去った道化は裏で踊る　――――――

ヒムロは16歳になった。時空術・心術以外の魔術適正、高い身体能力、そして、目覚めた『能力』

その能力は強力な物だったが、ヒムロはあえてそれらを好んで使うことは無かった。便利な物だが、依存しすぎればそれは大きな失敗につながるだろうかろうからだ。

まあ、人前で使うことができないと言うこともあるが。

そして、もう1つ。トシユキが3日ほど前、あと3日ほどで死ぬだろう、と言ったのだ。それは半精霊族（デミ・グリモワ）の感覚に近かった。半精霊族は10代前半で体の成長は止まり、寿命が来ればそれは自然と『分かる』物なのだ。

おおよそ寿命は600年ほど。多くの半精霊族は寿命を悟り、そしてその通りに『消えて』いく。死体は残らず、光の粒子となって空気に溶けていくのだ。

トシユキはおそらくそのような物なのだろう、と言った。自らの成長は70歳ほどで止まり、すでに3000年以上の時を過ごしている。もう何も悔いは無い、とトシユキはいった。

そして、今日は、その日。

「ヒムロよ。おまえに教えられることは全て教えた。トウテツもこれから役に立つことも多かろう。鷲が死んだら、そこの机に手紙を残してある。そこにこれからの指示を書いているから、それに従うんじゃぞ」

「じいちゃん」

ヒムロはトシユキを祖父のように慕っていた。だが、別れは来る。来ない出会いなど此の世には無いのだから。ヒムロもそれは理解している。だが、あきらめきれない。それがヒムロだった。

「どうやら、迎えが来たようじゃな」

「じいちゃん！」
トシユキの体は淡く発光し、徐々に光の粒子となっていく。まるで螢が漂うかの、その妖しくも神秘的な光景はどこか弱々しくも感じられ、生命のはかなさを物語っているようだ。
「ヒムロ。儂は十分に生きた。人の身に余る長寿じゃった。悔いは無い。いや、あえて言うなら、おまえさんがこんなに儂に依存していたことを思うと悔いもあるの。どうじゃ、最後の儂の悔いをぬぐってはくれないか」
「じいちゃん！　ずるいぜ。その言い方。それだと、何も言えないじゃんかよ。ずるいぜ。するい、するい、するい」
「すまんのう」
「・・・分かったよ。じゃあな、じいちゃん。達者でな」
「うむ。トウテツよ、ふがいない奴じゃがよろしく頼むぞ」
ヒムロの横に現れる銀髪の少女。幼さと老練さを併せ持つその容姿は、半精霊族のそれに近く、容易にはその年を推定することはできない。
「御意に。さらばです『造物主』」
「うむ。では逝くかの。さらばじゃ。若者達」
トシユキがそう言うと、その体は生への執着をすて、急速に光の粒子へと変わる。１０数秒の内に、トシユキは空気の中へと溶け消えた。
「じいちゃーーーーん！」
ヒムロは声を上げて号泣し、トウテツはそれを慰めようとそっと抱く。見た目だけなら、全くにていない兄妹だが、これでは立場が逆だろう。
しばらくすると、ヒムロも泣き止んだ。そして、俊之に言われたとおり机を探り、１通の手紙を探し出す。
手紙は蝋で封がされていたが、氷室が触れると、一瞬魔法陣が浮かび上がり、封が開く。中に入っていたのは３枚の紙。

これを読んでいると言うことは儂は消えてしまったのだろう。３００年も生きたのじゃ。十分じゃ。
さて、おまえさんにはファーレインの王都、ミルアージュでギルド登録をしてもらおうと思う。
豊穣の３の月の１２日にいけ。そこでおまえさんの仲間に会う。Ｓランクの冒険者じゃ。
表の名前はメアリエル、向こうでの名を天という。儂のことを言えば問題ないじゃろう。
後は向こうで説明があるじゃろう。おまえさんには来るべき『魔王』を倒してもらわねばならんしの。
この紙の裏に魔術陣がある。それを読み終えたら発動させるんじゃ。
おまえさんに渡すものがある。
２枚目はこれを取り出してからじゃな

ヒムロは１枚目の裏を見る。なるほど確かに魔術陣だ。ヒムロは魔力を通す。そうすると、精霊に伝わるでなく、自動的に発動し、そこには１つの布袋が置かれていた。
２枚目に目を通す。

さて、袋が出てきたじゃろう。中には何でも入るし、いくら入れても重さを感じぬ。
ついでにおまえさんが許可しないと開けられぬし、とられても戻ってくる。
この中は時間も止まっていて、鮮度は落ちない。ただし、生き物は中に入れられぬ。
中にローブと、剣が入っているじゃろう。ローブはおまえさんが会う奴らも同じようなローブをきとる。
その剣は『宝具』じゃ。使い方は触れれば分かる。他にも一通り必要な物は入れてあるし、中に詳しい説明書きも入れてある。
袋に手を入れ、必要な物を思えば自然と手に取れる。無造作に取り出すこともできるが、多くなりすぎるじゃろうからお勧めせんの。
じゃあ、最後に。3枚目じゃ。これは便利な紙じゃ。正式名称は無い。適当につけてかまわん。
生きたいところへの道筋や、現在地、世界地図や、周りにどれくらい生物がおるのか、それらは敵対か、中立化、味方か、
はたまた、近くにいる魔物が何なのかや、植物が何なのかまで教えてくれるし、メモ機能も充実、さらにかなりの大きさまで広げることもできる。
伸ばすだけじゃ。メニューからも大きさは変えられるぞい。おまけで高機能なペイント機能もある。袋と同じく、おまえさんと、許可した奴しか使えん。
儂のオリジナルじゃから、おまえさんが会う奴らも持っておらん。
便利な紙じゃ。思えば使える。メニューも呼び出せるからの。
ヘルプ機能でも見れば良かろうて。では、さらばじゃの。

２枚の手紙は燃え上がり、消える。手元に残ったのは１枚の古紙。ヒムロが、ミルアージュ、と思うと。その場所と、そこまでの生き方、最短距離の道筋、現在位置と、方向、さらには道のりでの見所や、危険地帯などの情報も表示され、凄い情報量だった。
まだ、朝は早い。トウテツに飛んでもらえばかなり短縮できるだろう、そう思い、ヒムロは怪鳥になったトウテツに乗り、小屋を去った。ミルアージュを残して。

その夜、トシユキの小屋。
光の粒子が集まり、やがて人型を作る。やがて、光りは収まり、完全な人へ。現れたのはトシユキ。
「ふう、１６年も同じ役をするのは疲れるのう。勇者を育てる師匠なんて、儂には会わぬよ」
誰かに話しかけるようなつぶやき。それを聞く者はいない・・・はずだった。
「次で最後ですよ。がんばってください。『大魔法使い様』」
トシユキの横にはいつの間にか青年が立っている。だが、トシユキは驚いたわけでも泣く、まるではじめからいるのが分かっていたかのように言葉を紡ぐ。
「うむ。最後が３０００年の中で最も有意義な役割（ロール）になるといいん

じゃがの。どれ、儂の最後のロールプレイじゃ。準備のために少し舞台から降りさせてもらうぞ。年老いた道化にはいささかきついのでな」
「ええ。しかし、期待してますよ」
「任せておれ。万事うまくいくはずじゃ」
「ぜひ」
そう言って青年はまるではじめからいなかったかのように消える。
「さて、儂も準備を進めよう」
老人は夜の闇にひっそりと溶けるように消えた。

第3話　ゲーム以上、それ未満

――――――第３話　ゲーム以上、それ未満　――――――

ミルアージュまでトウテツの背に乗りいくはずだったが、よく考えたら豊穣の３の月の１２日までまだ１週間はある。そこで、ヒムロは森に降り、トウテツと、実戦形式の訓練を行っていた。

トシユキの形見の宝具は、『焼き尽くす枝（レーヴァテイン）』といい、その剣で切った物は灰も残さず消し去るという、一撃必殺の剣だった。さらに地面に突き刺せば、たちまち大地は燃え上がり、空は赤色の染まり、周辺を消し炭にした。

・・・適当に山から気を魔法で奪って、植えて密度が低いが、まあ分からないようにした。

「・・・そろそろ行こうかな。あと３日だっけ？」

「はい・・・今日が豊穣の月の３の９日ですから」

「じゃあ、明日にでも出発しよう」

その日も深夜まで訓練をし、ヒムロとトウテツは寝た。

翌朝、トウテツは再び怪鳥になり、ミルアージュ付近まで飛ぶ。さすがにこのまま行くといろいろ面倒なことが起こりそうだったからだ。そして、まただらだらと訓練をして、気付けば豊穣の３の月の１２日。

無事ミルアージュに着いた。

「トウテツ、周りの人間の心を片っ端から覗け。危険そうな奴がいたら教えてくれ」

「御意」

そう言って、トウテツは姿を消しヒムロはギルドに入る。トウテツのこの能力に、氷室は街に出たときごろつきなどの相手をし、大変

重宝した。この能力を防がれたことはなかった。
ギルドの中には、様々な種族がいた。中でも目を引いたのは5人組。明らかにそこだけ空気が違う。周りの人間の態度も。
向こうはこちらに近づいてきた。まるでヒムロを待っていたかのように。
それは、次の瞬間に起きた。赤髪の女がぶれ、ヒムロは床にたたきつけられた。何が起こったのか、と周りを見ると、その横にはトウテツが人間の少女の姿をしたまま、茨に締め付けられ、倒れている。
「妾の主様の心を覗こうとは、良い度胸じゃな、ヒムロとやらよ」
「何故・・・名前を・・・」
「ここでやるのはやめておこう。マスターが来てしまうだろうし。イーリ」
ヒムロよりも少し年上であろう青年がそういうと、少女は、右手を少し挙げた。
次に現れたところは、どこかの宿屋の一室だった。
「さて、おい、いるんだろう？　ミール。お前のゲームに付き合ってやるからさっさとルールを説明しろ」
青年はそう言った。
「じゃあ、説明しようか」
さっきまでいなかったはずの場所に、まるで最初からいたかのように青年が現れる。
「これは、ゲーム、と言うにはいささか度が過ぎていて、だが、それ以上の物、と言われれば微妙なところなんだ。まあ、これはそういう物なんだよ、ヒムロくん。さて、君たちにやってもらうことは一つ。魔王を倒してもらう。と言っても、生半可な魔王じゃない。むしろ魔神。死神と言ってもいい。
　倒してもらいたいのは、寿命を与えし者、ツァーリ。あれはだいたい今から1年後に復活する。悪の魔法使いの手によってね。絶対に防げない。一種の運命みたいなものだ。全く、神様になったのに運命には従わないといけないなんて、滑稽だと思わないか？　さ

て、これは全部僕の自己満足のためだ。
　だけど君たちのためでもある。なぜなら、あれが復活すればこの世界は終わってしまうだろうからね。そして、そこまで来れば手遅れ。君たちでも無理だろう。だけど、復活したばかりならできるはずだ。魔法使い、彼に今回は不完全な復活をさせてもらう。それを、倒してもらいたい。
　君たちには能力がある。きっとできる。いや、できると信じたい。ではね。僕もあまり長いこと現世に干渉できない。君たちが無事にあれを殺せることを願う。影ながら支援するよ」
そう言って、青年は闇に消えた
「・・・1年か。神と戦うには短いような、十分なような・・・いや、短いな」
「そうね」
「”あれ”とたたかうなんて、と思いたくなるぞい」
「確かにな」
「忌々しいやつよ」
「えっ？　なに、なに、説明プリーズ！」
「こっちじゃプリーズとか言っても意味分からないから」
「分かってるじゃないか」
「だって地球人だし。まあ、いいや。後で説明はしてあげるから、今日は寝ろ」
そこでヒムロの意識は途切れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7302v/

Try and Error

2011年10月7日14時27分発行